

JTF JOURNAL 2016 05/06 #283

翻訳の未来を考える

巻頭記事

新連載スタート



お客様のご要望に応えるため
更なるベストサービスを目指しています。

プロジェクトチームに 参加しませんか？

在宅・オンサイト
翻訳者募集中！

IT関連 半導体関連 化学分析 金融

医療・医薬・医療機器 マーケティング・ビジネス関連



Communication for
a global marketplace



株式会社 十印（とおいん）
〒141-0031 東京都品川区西五反田7丁目25番5号 オーク五反田ビル
TEL 03-5759-4371（採用担当窓口まで） <http://www.to-in.com>（「お問い合わせ」）

言葉をインフラに、世界の知財をつなぐ 私たちは知財のプロフェッショナルです

業務内容

- ◎ 特許翻訳【英語・中国語・韓国語・欧州アジア各国言語】
- ◎ 知財アカデミー®【教育・情報提供】
- ◎ 知財ヒューマンリソースズ®【人材派遣・人材紹介】
- ◎ 国内／海外出願用図面作成【特許・意匠】
- ◎ 海外出願事務代行サービス、海外特許調査
- ◎ 中国知財裁判情報提供

フリーランス特許翻訳者常時募集中!

※応募方法など詳細は www.chizai.jp へアクセスください。

海外拠点

* 中国現地法人
知財情報諮詢(上海)有限公司
www.chizai.com.cn

* 共同出資会社
雅訳諮詢(大連)有限公司
www.asia-translate.com

株式会社 知財コーポレーション (創立1976年)

〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-10-1 日土地西新宿ビル7階

TEL: (03)5909-1181(代) FAX: (03)5909-1183

www.chizai.jp E-mail: info@chizai.jp ISO9001:2008認証取得

2016年12月、
創立40周年を迎えます



「英語が好き」を仕事にしたい。わたしの夢を、ここでかなえる。

通学科／通信科講座、
ワンデーセミナーなど
多彩なプログラムをご用意。
「翻訳実務検定TQE」を運営し、
翻訳者の育成に力を入れています。



登録翻訳者の皆様に無料で使ってもらえます
最新の翻訳メモリ・用語集・作業進捗を共有できます

～まずは30日間無料でお試ください～
www.memsource.com/ja/pricing

日本語マニュアル・ブログ
blog.memsource.com/ja/

E-mail: japan@memsource.com TEL: 03-4360-5563

日本オフィス：〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-12-1 渋谷マークシティ W22階

本社：Spalena51, 110 00 Prague, Czech Republic (チェコ共和国プラハ)

Memsource



“ memoQは
本当にプロフェッショナルな
翻訳ソリューションを
クライアントに提供できます。
サーバーバージョンは
プロジェクトの透明性が得られ
ワークフローのコントロールが
容易になります。
またリソースの共有も
難なくできるようになります。”

Edimart (ハンガリー), 社長, Márta Balázs

業務が拡大していますか？
30日間無料のクラウドサーバーソリューション
を試し、気に入れば月契約してください！
memoq.com/memoq-cloud-server

飛躍的な業務拡大には？
30日間無料のサーバートライアルを
お試しください！
memoq.com/memoq-server

sales@kilgray.comにご相談ください。



翻訳の未来を考える

JTF JOURNAL



表紙撮影：世良武史

JTF JOURNAL

日本翻訳ジャーナル
2016年5月/6月号 #283
発行人●東 郁男(会長)
編集人●河野 弘毅

#283 2016 05/06

c o n t e n t s

巻頭記事：新連載スタート

- 6 新連載、はじめました ● 河野 弘毅
- 7 JTFジャーナルの刷新、そして今後へ向けて ● 目次 由美子

連載記事

- 10 続・翻訳者のための作戦会議室 第1回 ● 井口 耕二
- 12 メディカル翻訳者のキャリアパス 一流翻訳者になるために ● 石岡 映子
- 14 いまさらながらの・・・CATツール★超基本
第1回そもそもCATツールって何? ● 加藤 じゅんこ
- 16 帽子屋の辞典十夜 第1回「Webster 辞書のなぞ」 ● 高橋 聡
- 18 「何でも教えてキカク」 ISO17100 認証取得に必要な準備 ● 田嶋 奈々
- 20 翻訳品質のランチボックス 翻訳の「品質」とは(1) ● 西野 竜太郎
- 22 翻訳者のためのWord再入門 Wordの初期設定 ● 新田 順也
- 24 機械翻訳の近未来 ドキュメント翻訳 ● 本間 奨
- 26 翻訳テクノロジーを学ぶ ～導入編～ ● 山田 優

28 翻訳業界インデックス



JAPAN TRANSLATION FEDERATION

一般社団法人 日本翻訳連盟
〒104-0031
東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL 03-6228-6607 FAX 03-6228-6604
info@jtf.jp http://www.jtf.jp/

無断転用禁止 ©2016 Japan Translation Federation

新連載、はじめました

JTFジャーナル編集長 河野弘毅

「翻訳は対象を制御できない」という名言を、山岡洋一さんはその著書『翻訳とは何か―職業としての翻訳』の冒頭に書いています。私は以前、小さな翻訳会社を経営しつつ自分でもかなり翻訳をやっていたのですが、何年か翻訳をやって大量のテキストをコンスタントに訳文として「出力」する作業に慣れてくると、だんだん自分の中にある種のフラストレーションが溜まってくるのを感じました。それは「自分が書きたいことを自分が書きたいように自由に書きたい」という欲望です。

翻訳という仕事ではかならず原文という「入力」が固定されており、「自分が書きたいこと」を勝手に書くなどもちろん許されません。また、多くの場合に産業翻訳ではスタイルガイド等を用いて「出力」の約束事が決まっており、「自分が書きたいように」自由に書くこともできません。ところが毎日翻訳をやっていると、文章の書き方が以前の自分よりうまくなってきて、以前よりスムーズにキーボードから言葉を紡げるようになってきます。つまり、「書くチカラ」は以前よりアップしているのに、「書く内容」はがっちり拘束されているわけです。

そのことにフラストレーションなど感じないのが職人としては望ましい資質なのかもしれませんが、私自身は「自分が書きたいことを自分が書きたいように自由に書きたい」という欲求がだんだん強くなり、その欲求をどこかで満たさないと仕事が手につかない（要するに意志が弱いだけですが）状態に至ったため、誰に頼まれたわけでもない文章（IT翻訳の仕事の進め方）を思

いつくまに書いて、業界誌の編集部を持ち込んで掲載してもらいました（当時まだ「ブログ」というものが発明されておらず誰かに読んでもらう方法として雑誌投稿しか思いつかなかったため）。

こんな「自分の文章を書きたい」という面倒なフラストレーションを抱えているのは自分だけかと思っていたら、翻訳業界には私と同じように「自分の文章を書きたい」という欲望をもつ人が実は少なからずいるということがJTFジャーナルの編集を続けていくなかでわかってきました。その一方で、翻訳業界の中で「この人からこのテーマで話を聞きたい、教えてもらいたい」ということはよくあります。

JTFで行っている各種セミナーは、そういうテーマを談話の形で伝えてもらうメディアなわけですが、これをテキストの形で実現するメディアとして、これまでJTFジャーナルに掲載していた「コラム」という形式よりももっとまとまったコンテンツを掲載できる形式、すなわちスペシャルなテーマについてスペシャルな人に継続して執筆してもらう「連載記事」という形式を用意して、「自分の文章を書きたい」と今、感じている「スペシャルな人」を発掘して執筆依頼すれば、これは有意義なコンテンツが産まれるんじゃないか！？というアイデアをもとに、JTFジャーナルの構成を大幅に変更して、連載記事主体のJTFジャーナルを編集したのが今月号です。

なお、これまでJTFジャーナルに掲載していた「イベント報告」は今後はウェブ媒体のみに掲載します。また、今回のJTFジャーナルのリニューアルを皮切りに、今後一年間かけてJTFホームページのリニューアルも行っていく予定ですが、これについてはまた次号のJTFジャーナルでご紹介します。

JTFジャーナルの刷新、そして今後へ向けて

JTFジャーナル2016 キックオフミーティング

日時 ● 2016年3月4日（金）16:00～18:00

開催場所 ● 株式会社翻訳センター カフェコンシェルジュ

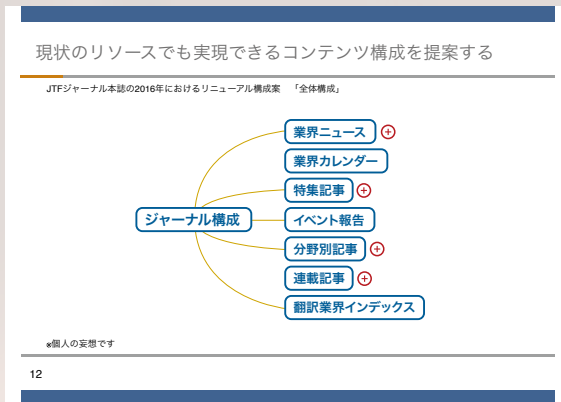
報告者 ● 目次 由美子 (LOGOStar)

2016年2月末のある日、日本翻訳連盟の事務局員である矢野和美氏から『JTFジャーナル』の編集会議へ参加を要請する旨のメールが届いた。ジャーナルには執筆の機会を幾度か頂戴しており、今後の執筆協力者にも呼びかけているとのこと、編集委員を務めておられる諸先輩方に御礼申し上げたいこともあり、一も二もなく私は参加承諾の返信を差し上げた。

当日、会場に到着すると、4人掛けのテーブルそれぞれには色鮮やかなJTFジャーナルのカラー冊子と付箋用紙、A3サイズの白紙が数枚ずつ置かれており、矢野氏から参加者リストが手渡された。秀逸なレイアウトでジャーナルに深みをもたらしているデザイナーの中村ヒロユキ氏、数々の美しい写真でジャーナルに華を添えているカメラマンの世良武史氏をご紹介いただき、感激しながらも参加者リストを再見すると、そこには錚々たる面々が名前を連ねていた。以前からジャーナル編集委員として活躍している方たちを含め、あのベテラン翻訳者さんも、翻訳会社でコーディネーションに従事されている方も、品質管理に力を注いでおられる方も、翻訳ツールで著名な方やプログラミングで名を馳せているあの方も、翻訳という事業がもたらすさまざまな面で活躍する精鋭が集っていた。

恐縮しながら着席して程なく、プロジェクターから「JTFジャーナル2016 キックオフミーティング」というテキストが映し出され、編集長である河野弘毅氏の挨拶と共に会議が始まった。

河野氏からは「JTFジャーナル2016の発行計画」が発表された。日本翻訳連盟の事業目的、連盟が実施すべき情報発信、翻訳業界誌全体におけるJTFジャーナルの位置付けについてなど、2016年度のジャーナル製作に取り組むにあたっての目的と目標が解説された。そして、ジャーナルの全体的な構成や分野別のコンテンツ、連載記事をまとめるブックレット製作についてなど、河野編集長の構想が説明された。



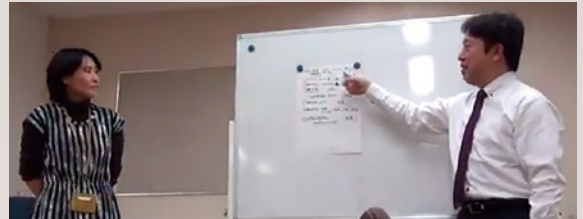
ここで、執筆者の一人であり、先行して連載へ向けての取り組みを推進している西野竜太郎氏から、「連載案作成の流れ」というタイトルで簡単なレクチャーが実施された。

西野氏からは、10回分の連載記事に関する目次と概要が紹介された。西野氏自身による連載案を作成するための流れは以下のとおり。

1. テーマに沿ったトピックの収集
2. ストーリーの作成
3. 優先度の付与
4. 不要トピックの削除

実際には、2～4については繰り返しての検討が必要であるとも指摘があった。

そして河野編集長から、本会議の参加者には原則として連載記事の執筆を依頼する予定であり、連載案の作成が要請された。さらに、これを踏まえて、ワークショップが進行された。1チーム3名、4つのチームに分かれて、「私が読みたい特集記事」という課題で、自分自身がJTFジャーナルで読みたい記事の特集について議論した。約5分間のチームごとのディスカッションの後、参加者全員による発表会を行った。



発表会では実に多種多様なアイデアが各チームから披露された。翻訳者の本棚拝見、トライアル文書の公開、翻訳を見据えた都市デザイン、クライアントクレーム集、多言語展開の難しさ、機械翻訳の未来、官公庁の発注システム、翻訳業での節税対策、通訳者向けコンテンツ、語学学習と翻訳などなど、ほんの一部を列挙するだけでも今後の展開が楽しみに思われ、私が覚えた高揚感はこの文章を今読んでいる読者の皆さんにも共有いただけるのではないだろうか。

発表会の終了時には、河野編集長による独断により、実に13個の企画を創出した矢野事務局員、株式会社アスカコーポレーションの千種美穂氏、そして私自身が所属したチームが僭越ながらグランプリという名誉を拝受した。

連載記事の執筆陣に関する詳細や、実際に誌上で展開される企画についても今後の楽しみとして、刷新された『JTFジャーナル』を読者の皆様にご期待いただきたい。



私は 本気で極めたい

実務に即した授業

充実の講師陣

時代に生き残る専門力を身につけた翻訳者に



アンセクレツォとは、日本（アジア）、トルコ、ギリシャ、西ヨーロッパ、ゲルマン、東ヨーロッパ、南アフリカ、言語で世界を目指したエスペ란トの各国の英語の Safety にあたる翻訳用語の頭部分を取ったアン・グー・サファレ・セク・ジヒ・ベラブラ・ベグリヘイト・セクレツォの最初と最後の部分を繋げたものです。

これらの国や組織は、かつて文明・技術で世界を席卷した時代がありました。

私たちはこの教室を開くにあたり、彼らの初めの思いに同調し、みなさんの医学翻訳への最初の船出が安全性翻訳に関わるものであり、無事航海を終えることができるように祈ってこの名称を付けました。

医学翻訳を学びたい方は

アンセクレツォ



医学翻訳教室 アンセクレツォ

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-21-2 京橋第九長岡ビル 4F

株式会社ウィズウィグ内

TEL : 03-5566-7757

<http://ansekureco.wysiwyg.co.jp/>

WysiWyG

WysiWyGとは、What You See Is What You Get の頭文字をとったもので、「表示されたものがそのまま出力される」という意味を有するDTP用語です。ドキュメントの専門家を示す用語としては少しかけ離れていますが、私たちはこの言葉を、見えるものを正確に理解して表現する、すなわち「科学的に正確な文書の作成」をするというキータームとして捉え、社名としました。

専門家集団として、正確かつ精緻なサービスを提供し続けたい、そんな想いがこの社名に込められています。

翻訳者のご応募は

ウィズウィグ募集



株式会社ウィズウィグ

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-21-2 京橋第九長岡ビル 6F

TEL : 03-5566-1669

<http://www.wysiwyg.co.jp/>

続・翻訳者のための 作戦会議室

第1回

井口 耕二

技術・実務翻訳者
翻訳フォーラム共同主宰、JTF常務理事

本号から新連載として、翻訳フォーラムのメンバーがオムニバスで記事をお届けする。

翻訳フォーラムというのは井口を中心に翻訳者がオンラインで情報交換をしているサイトだ (<http://www.maruo.co.jp/honyaku/>)。その前身はインターネットがまだなかった時代にパソコン通信として一世を風靡した@niftyのフォーラムで、発足は30年近くも前の1990年ごろである。

執筆メンバー4人は、高橋さきのが特許やサイエンス系(出版含む)、高橋聡がローカライズなどIT系、深井裕美子がエンターテインメント系、そして井口が技術系全般および出版と分野は全員ばらばらである。

業界的には接点がないに等しいはずであるにもかかわらず、この4人が20年近くも連綿と議論してきたことがある。「翻訳者の頭のなかはどうなっているのか」だ。分野が大きく違うので「××分野の翻訳」といった話ではできず、必然的に、分野横断の話、翻訳そのものの話になる。その「翻訳そのものの話」をしようというのが、本連載の趣旨である。

翻訳業界の現状

本誌を読んでおられる方なら、みなさん、先刻ご承知だと思うが、最近の翻訳業界は翻訳者にとって厳しい状況が続いている。単価は下落気味だし納期は短くなっている。コストダウンのあおりでひどい翻訳になってしまったものを安い料金をリライトしてくれという仕事も増えているようだ。今後は、機械翻訳の出力をポストエディットする仕事が増えるという話もある。

このような変化は、ほとんどが、現場の翻訳者にとってプラスかどうかと関係ないところで進んでいる。「翻訳者にとってもメリットがある変化だよ」と言われるものもあるし、翻訳者のなかにもそういう人がいたりもするが、そのようなものも眉につばをつけて聞くべきであることは過去を見ればわかる。たとえば翻訳メモリー。翻訳メモリーが登場したころ、「翻訳メモリーの導入で単価が下がっても、処理量が増えるので翻訳者にとってメリットがある」などとあちこちで言われていたが、これがおためごかしに過ぎなかったことは、

当時から仕事を続けている人の目には明らかだろう。

翻訳メモリーと言えば、先日、あぜんとすることがあった。この記事を書くため、翻訳会社の求人情報をチェックしたのだが、マーケティングコンテンツの翻訳者募集だというのに翻訳メモリー必須となっているところが少なからずあったのだ。訳文の再利用ができず翻訳メモリーのメリットが生かせない分野であるのに、しかも、「切れ続き」など文脈の流れに悪影響が出て訴求力が落ちがちという翻訳メモリーのデメリットが問題になるはずの分野であるのに、翻訳メモリー必須とは……。

この話を、翻訳メモリー使いが訴求力が必要とされる文書の翻訳が上手な人にしたところ、「そういう案件は、文脈が見やすいベタで翻訳し、最後に翻訳メモリーに流し込んで納品している」と返ってきた。さもありません。

翻訳会社の求人情報に「機械翻訳のポストエディット」が増えてきているのも心配だ。機械翻訳のポストエディットは翻訳とは大きく異なる仕事だが、翻訳会社が求人していることもあり、翻訳者になる入口としてこの仕事を選ぶ人が出かねないと思われるからだ。機械翻訳のポストエディットや質の悪い翻訳のリライトなどを続けると、翻訳者の基盤である言語感覚が狂ってしまう。つまり、そのような仕事をしていたら、翻訳者になる道は閉ざされてしまう。そうとわかっていて選ぶのなら本人の自由だが、誤解で選んでしまう人はかわいそうである。

翻訳者としての対応

このような業界の状況は、翻訳者にとっては外部要因であり、そのなかでどう生きていくのかを考えるしかない。どう対処するのがいいだろうか。

ちまたにはさまざまな意見があり、対立するものや両立できない

ものも多い。たとえば単価下落については、低単価を前提にツールでスピードアップをはかるべきという意見があれば、価格の低下に抵抗すべき、品質をあげて高単価を狙うべきなどの意見がある。新しい仕事についても、積極的に取り組むべきという意見もあれば、翻訳者にとってコアな部分に集中すべきという意見もある。

私は、業界の状況を視野にいれつつ、自分が10年後や20年後、あるいは30年後にどういう翻訳者になりたいのかを「考えて」行動すべきだと思う。自分はどのような仕事がしたいのか、そもそも、なにがしたくて翻訳を仕事に選んだのか。この原点を忘れて情報に流されたのでは、自分が目標としているところにつながっていない道に進んでしまうこともありうる。それでは、翻訳者として自分なりの幸せをつかむことなど不可能だろう。

環境が予想外の方向に変化した場合のことも考えておく必要があるだろう。現状の把握は必要だが、それが10年後、20年後、30年後まで続くとはかぎらない。ほかに転身できる力を身につけておかないと、状況が大きく変化したとき路頭に迷うおそれがある。

自分の道は自分で選べと言われなくても、選びまちがったらどうしようと心配で選べない人もいるかもしれない。そういう人には、まず、「選ばないのは、流される道を選ぶに等しい」ことを指摘しておこう。また、進む道を選びまちがった場合も、自分で選んだ道であれば失敗しても納得できるだろうが、流されて選んだ道が行き止まりだったら悔やんでも悔やみきれない思いをするのではないだろうか。

じっくり考えた結果、機械翻訳のポストエディットで生きていこうと決断するのであれば、それはそれでいいと思う。私自身は翻訳の道を究める方向を目指しているが、正直なところ、それがだれにとっても一番であると断言できるわけではない。将来が不透明であ

るのは、いわゆる翻訳の道を究めようとしても機械翻訳などの新しい領域を進むのも同じである。業界の状況はどんどん変化してゆくのだから。だから、自分の強み、弱み、好みなどを考え合わせ、自分が進む道を各自が選ばなければならないのだ。

本連載について

本連載の題名「続・翻訳者のための作戦会議室」を見て不思議に思った方もおられることだろう。新連載なのにどうして「続」なのか、と。

「続」のない「翻訳者のための作戦会議室」は、2012年から2015年までの3年間、別の媒体（通訳翻訳ジャーナル）に連載していた。執筆メンバーは本連載と同じである。

ちなみに、この4人は、連載の執筆以外に、数年前から、100人ほどの翻訳者が集まる翻訳フォーラムシンポジウムを年に1回開催したり（JTFジャーナルの「イベント報告」でも取りあげられている）、10人程度のプロ翻訳者による年6回の「めだかの学校」を実施したりしてきている。いずれも、分野に縛られない翻訳そのもの、その本質を明らかにしようというのが主眼である。

このような活動を通じて、自分たちの頭のなかでなにか起きているのか、少しずつ説明できるようになってきた。ある意味、その集大成と言えるのが、本誌発刊のころに出版される『プロフェッショナル4人が教える 翻訳のレッスン』（講談社）である。これから翻訳の勉強を始める人にも配慮した作りではあるが、中堅クラスにも読み応えのある内容になっているはずだ。大きな書店に行った際には、内容を確認していただければと思う（ニッチな本で部数が少ないので、大型書店でなければ置いていないと思われる）。

こうして、ここ数年の活動がまとまり、ひとつの区切りを迎えた

わけだが、まだまだまとめられていない側面がたくさんある。それを少しずつでも説明できるようにしよう、そういう努力を続けていこうという話をしていたところで、本誌編集部から連載のお話をいただき、こちらに書かせていただくことになった次第である。

内容は、冒頭にも書いたとおり、どの分野にも共通する「翻訳そのものの話」だ。言い換えれば、「翻訳そのものの力をつけたい」と思う人たちに役立つ内容を取りあげていく。単純に「こういうものはこう訳す」的な話ではなく、翻訳の基盤部分まで深掘りした話になるので、とっつきにくい印象を受けるかもしれない。あまり実用的でない印象を受けるかもしれない。でも、そこまで掘りさげて考えなければ翻訳の力はつかない——少なくとも、執筆メンバー4人はそう考えている。じっくりお付き合いいただければ幸いである。

Writer Profile

井口 耕二
Inokuchi Koji



工学部出身で、会社員時代はエネルギー分野の研究者をしていたため、一番の専門はエネルギー・環境だが、IT系など幅広くカバーする。翻訳言語は英日・日英。最近是非ノンフィクション書籍の翻訳もしており、主な訳書に『ステイプ・ジョブズ1・II』（講談社）、『ステイプ・ジョブズ驚異のプレゼン』『リーン・スタートアップ』（日経BP社）、『閉じこもるインターネット』（早川書房）がある。また、著書に連載担当4人の共著による『プロフェッショナル4人が教える 翻訳のレッスン』（講談社）がある。
ブログ：Buckeye the Translator
<http://buckeye.way-nifty.com/>

●メディカル翻訳者の キャリアパス

石岡 映子

株式会社アスカコーポレーション
代表取締役

一流翻訳者になるために

医薬（メディカル）翻訳者の割合は、以前は産業翻訳全体の10%前後でしたが、最新の調査では21.7%にまで増えています。リーマンショック以降、IT翻訳者の割合が減っている（17.9%）分が医薬翻訳にスライドしていることも考えられます（図1）。

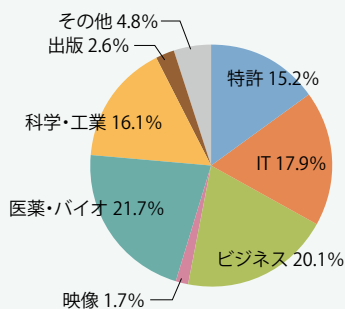


図1：翻訳収入の分野別の比率（主要な分野を3つまで選択）
（JTF 2013年度翻訳白書 第4回翻訳業界調査報告書より）

その他、製薬企業に入社したものの、結婚、転勤、出産などを機に、自宅のできる翻訳という仕事を選択する人も増えているのかもしれない。または、研究者、看護師をしていたけれど、以前から興味があった翻訳という仕事してみたい、と思う人も多いようです。

ASCAでは随時翻訳者の応募を受け付けています。トライアル試験とプロフィール、面談などにより厳正な審査を行い、合格率が最終2~5%、というとても厳しい関門です。登録後も決して安泰ではなく、ご本人とASCAが研鑽し合いながらキャリアを積んでいくこととなります。メディカル翻訳者は人気があるものの、結構厳しいのが現実です。

ASCAに登録している翻訳者のバックグラウンドは図2のとおりです。圧倒的に理系出身者が多く、医師、獣医、看護師、製薬会社で勤務経験を積んだ方も多く、MRなどをされていた方もおられます。基礎研究の論文、試験報告書、統計、検査所見に関する翻訳文書では、医薬の基礎知識が必須となりますから理系の人は優位です。

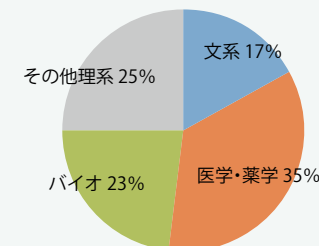


図2：登録翻訳者の出身学部

一方、文系だと医薬の分野の仕事はできないのか、ということではなく、英文科はもちろん、経済、法学部出身の方など、意外と学部は関係ありません。

なぜなら製薬企業でも、依頼される内容は、遺伝子や、解剖などの知識を必要とされる文書ばかりではなく、人事、法律、広報などはもちろん、治験やマーケティング、CIOMSなどもそれほど専門性は要求されません。

ASCAが受注している文書の種類の割合は図3の通り。医薬の基本的な知識は必要ながら、仕事を通じて勉強を重ねることで、文系出身者の方でも対応可能です。

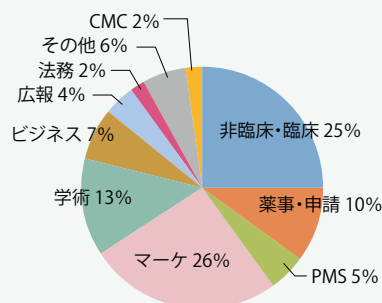


図3：文書別受注実績（2015年8月現在）

専門知識は現場で業務、研究されている方になかなかないわけで、実際にはクライアントが翻訳者に最低限求めるのは、「参考資料にきちんと合わせる」「文法の解釈間違えによる誤訳をなくす」「訳文だけで読んでレビューできるような読みやすく表現する」ことです。結局は、リサーチ力、読解力、表現力などで評価が決まり、収入のランキングを見ると、実は文系の方が上位を占めています。

専門知識はあるに越したことはありませんが、困るのは、専門知識があるがゆえにその分野しかできない、原文の良し悪しにこだわるがゆえに時間がかかりすぎる、専門用語に目が行くばかりにケアレスミスが目立つ、英語力・日本語力に問題がある、英語の構文解釈を取り違える、など。つまり、医薬翻訳と言え、一流になるために

は、社会常識、英語力、日本語力の基礎力が重要なポイントになります。

ASCAで成功している翻訳者の事例を紹介します。

Aさん：大学で薬学を専攻し、製薬メーカーに勤務し、文献翻訳なども行っていた。結婚したのち英語を集中的に勉強し、翻訳学校でも数年訓練を受け、ASCAで英日の翻訳をスタート。化学品、医療機器、文献など片っ端から挑戦した。同様の内容の文書の日英翻訳も手がけ、先輩やネイティブ、クライアントのフィードバックを貪欲に習得し、Aさんの英訳は英語ネイティブも絶賛。ASCAのリピートNo.1を誇る。

Bさん：外国語大卒業。会社勤務を経て、結婚後、翻訳学校で英語と翻訳を勉強し、ASCAのチェッカーとして業務を始める。積極的にチェック業務を受けてくれる姿勢は社内評価も高く、仕事の依頼数ランキングは常に上位だった。ASCA Academyの選抜メンバーに選ばれたのち、講師からの評価も高く、指導付きで業務を開始。日英の大型プロジェクトに参加し、先輩翻訳者の指導を受けながら実際の翻訳を担当した。CIOMSのチェックや翻訳も積極的に対応し、経験を積んでいる。現在ASCAの伸びしろNo.1だ。

Cさん：医学部保健学科卒業。看護師として勤務したのち海外でアルバイト、製薬メーカーで治験モニターを経た後、医薬翻訳の学校で勉強し、講師の紹介でASCAのトライアルを受け、合格。治験文書はもちろん、広報、マーケティング分野の翻訳にも対応。子育てをしながら時間を効率よく使い、積極的に仕事を受けてくれる。ご主人の転勤で地方に引っ越しても、定期的にASCAのオフィスに足を運び、自分の弱点や学習方法について相談してくれる姿勢を皆が評価。ASCA登録時は翻訳未経験だっ

たが、着実に実力をつけ、ASCAで人気No.1翻訳者である。

Dさん：文学部英語英米文学科卒業。翻訳学校で医薬翻訳を受講。翻訳会社でチェッカーの経験を経てASCAで翻訳を開始。薬理、薬物動態や統計などは苦手ではあるが、治験文書全般、CIOMS、マーケティング資料などの翻訳には定評がある。勝手に解釈を加えない素直な翻訳文に定評があるし、何よりも参考資料に丁寧に合わせてくれるので信頼できる。参考資料が多い翻訳案件ならだれよりも安心。

Eさん：英語科卒業。IT企業での社内翻訳を経て、製薬メーカーで派遣として副作用関連の翻訳に従事し、論文や社内文書の翻訳も経験。ASCAのトライアルに合格後は、CIOMSをはじめ、症例報告、CTD、医療機器関連、マーケティング資料など幅広く対応している。先輩からのフィードバックに忠実であり、オフィスへの訪問などにもとても積極的である。コミュニケーション能力に定評があり、総合力、バランス力抜群の翻訳者である。

Fさん：文学部英文科卒業後、米国の大学院に留学・卒業。貿易事務、翻訳コーディネータ、製薬メーカーでのCIOMS翻訳をしながら副業で医薬翻訳や校正の仕事を始め、その後独立。翻訳学校の通信教育は受けたことはあるものの、翻訳は実践を通して習得。翻訳業界のイベントへの参加も積極的で、翻訳会社のツボを押さえているのが何よりも強み。積極的に依頼したい翻訳者の一人だ。

上記のとおり、文系出身者でも一流に。多様なケースはあるものの、おおむね医薬翻訳者に必要なのは、医薬に関する高い知識より、プロ意識、素直さ、積極性、謙虚さ、貪欲さ、タフさ、高い言語スキルだと言えます。“知りたい”気持ちがあれば専門知識はついてくる

ものです。一流の翻訳者でも、新しい内容に遭遇したときは、一晩で参考書籍を読み、ざっと理解したうえで翻訳に挑戦していますから。

医薬翻訳だからと言って決して支払単価が高いわけでもなく、調べるだけで多くの時間を費やしてしまいます。大きな収入が目的であればこの職業は薦められません。それでも、実力次第で仕事を得るチャンスは多くあり、ゲノムや再生医療、新薬など、この仕事をしていなかったら知りえなかった、先端情報の中で仕事をする醍醐味は他には変えられません。

翻訳会社でチェッカーとして働く以外に、製薬メーカーに派遣で働く、CROに派遣でCIOMS翻訳する、など様々なキャリアパスがあります。近道はありません。まずは翻訳会社に自分を売り込み、あとは本人次第、やる気があれば道は開けます。

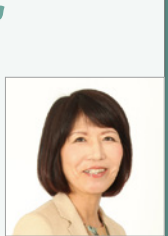
次号以降、医薬翻訳の品質、知っておきたい基礎知識など、具体的なエッセンスをご紹介します。請うお楽しみ。

Writer Profile

石岡 映子

Ishioka Eiko

株式会社アスカコーポレーション 代表取締役、JTF 理事
兵庫県出身。大学卒業後、株式会社インターグループで会議運営などを手掛ける。1995年にアスカコーポレーションを設立し、医薬翻訳、企画、編集など、ライフサイエンス分野に特化した多様なサービスを展開している。





いまさらながらの・・・

CATツール★超基本

加藤 じゅんこ

Memsource Marketing Manager

第1回

そもそもCATツールって何?

CATとは、Computer Aided Translation Toolの略です。訳すと、「翻訳支援ツール」となります。翻訳支援ツールとは、翻訳メモリ/用語集/機械翻訳エンジンを利用して、効率的に翻訳を行うツールです。翻訳メモリとは、文章単位の辞書のようなもの。原稿と翻訳の対訳データベースです。もし今回翻訳する原稿と内容が似通った翻訳メモリがあれば、メモリを流用して、新規翻訳量を減らすことも可能です。

といったことでむずかしい内容ではありませんが、翻訳業界でない方にはあまりご縁のないツール。理解してもらうのは、意外とむずかしいものです。これまで業界外の人に「翻訳支援ツール」というと、「自動翻訳してくれるツール」と誤解されることも多々ありました。「そんな夢のツールがあったら翻訳がいらなくなっちゃうから!」と、つっこみたくなります。テクノロジーの発展と共に変化していくと思いますが、現在は、翻訳支援ツールとは「人間が行う」翻訳作業を便利にしてくれるツール。自動翻訳ツールではありません。

ですが、かくいう私自身、実はCATツールとはなんだかさっぱり分からぬまま、翻訳業界に入ってきました。

当時はいまから10年ちょっと前。CATツールといえば、TRADOS(トラドス)。TRADOSはローカライズ業界にどんどん普及していました。ですが、その他の分野では、お客様も翻訳者もTRADOSのことや翻訳支援ツールのことをご存知ない方が多くいらっしゃいました。翻訳会社側から不用意にお客様にTRADOSの使用についてお伝えすれば、翻訳料金のツライ値下げを求められる可能性があります。また、翻訳者にも、使っていたきにくい状況でした。そもそも、ツールの購入代金をどちらが負担するかが問題です。お仕事をお願いできるかどうか分からないのに、「ツールを買ってください」というのは、非常に心苦しいわけです。また、トレーニングをどのように実施していくかの問題もありました。

そういった中、当時は、フロー全体ではなく、部分的にCATツールを取り入れる、といった方法を行っていました。CATツールは、本

来は翻訳プロジェクトの全工程で使用するものです。ただ、無理にとりいれてトラブルが発生するよりも、可能な場所に部分的に導入する、という方法によって安定した効率化をはかることができました。

現在は、当時と比べ、CATツールはだいぶ普及していると感じます。ですが、仕事柄、CATツールを初めて導入されるという会社の担当者の方とお話することも多くあります。ツールをご利用いただくにあたってご質問を頂くのですが、そこで感じることは、CATツールを使用する際の準備面・運用面も含めた内容について知る機会は、意外と少ないということ。もしかしたら、CATツールと様々な関わり方をしてきた私のマニアックな経験がお役にたてるのではないかと、思い本連載を執筆させて頂く運びとなった次第です。

第1回の今回は、ツール導入にあたっての準備について、お伝えしたいと思います。

ツール導入時に行うこと

翻訳支援ツールを効率的に使うために、ツール導入時に行ったほうがよいことがあります。翻訳メモリと用語集の準備です。

もしも良質の過去の翻訳資産をお持ちの場合には、これをメモリ化しなければ、もったいない!メモリ化することの利点は、コスト削減・時間短縮・品質向上の三拍子です。もちろん、誤訳ばかりの原稿をメモリ化してしまうと品質にも影響するので、メモリ化する文書を選ぶ、といった工程も必要かと思えます。

メモリ化は、「アライン」という作業によって行います。日本語と英語の対応する箇所を紐づけしていく、という非常にシンプルな操作です。アライン作業を自動的に行うのも可能ですが「ずれ」が生じてしまいます。場所によって1

つの和文が、2つの英文に対応していたり、その逆もあったりします。そのため、人の目でみて修正していく必要がでてきます。

アライン自体は非常にシンプルな作業なので、外注化もしやすい業務です。アライン作業後にできたメモリは、原稿の内容ごと・お客様ごと等、何らかのルールでまとめていくと使いやすいかと思いません。

次に用語集についてですが、こちらはエクセル形式でお持ちであれば、ツールによって変換する必要があるが、大体どのCATツールでも流用いただけるかと思えます。ご留意点としては、用語欄に余計な説明がはいってしまったりしていないか、また、ひとつの用語に対して、優先順位や使用方法などの指定がなく複数の訳語が存在していないか、といった点となります。

ツールご利用前に行うこと

翻訳メモリと用語集がそろったら、原稿がきてすぐに翻訳支援ツールが使えるか・・・といいますが、そうではないこともあります。原稿によっては「前処理」が必要となります。

メモリや用語集は前もって整備しておくことが可能ですが、原稿の前処理は、実際の原稿がきてないと進められません。ただ、あらかじめ原稿の形式が分かっていたら、前処理のためにかかる時間を想定しておき、フローを組み立てておくことは可能です。

ツールを使用する際に辛いのが、PDF形式の原稿。データ化作業が必要です。翻訳業界にはいつ以来、PDFファイルを、PDFに変換する前の状態に戻す効率的な方法を求め、不毛な実験をしてきました。そもそもPDFとは、紙に印刷していたレイアウトを保ったまま、デジタル形式で情報を保存するファイル形式です。いったん

PDFファイルにしてしまえば、それがどんなアプリケーションで作成されていたかに関係なく、PDFビューアさえあれば「きれいに見える」ようにすることが目的です。当然ながら文字情報をテキスト形式で取り出せることなど目的外です。

PDFファイルを元のファイルに変換するツールで楽になるものの、やはり人が行う作業は出てきます。

非常にあたりまえな結論ですが、一番良いのは、(そうはいかないことが多いのは思い知ってはいるものの・・・) PDF化される前のオリジナル原稿を用意できることです。

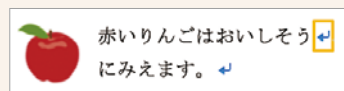
Adobe Acrobat Readerのファイル/プロパティ/概要/詳細情報に、PDF変換に使用したアプリケーションが表示されます。ここから、オリジナルの原稿形式を推測できる場合もあります。

(プロパティ/概要/詳細情報表示例)

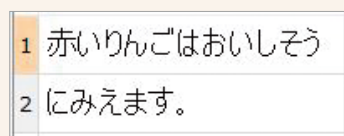


PDF以外の原稿の場合にも、「きれいに見える」ために、たくさんの「不要な改行」が入っている場合があります。こういった原稿は、ツールに流し込んだ時に、おかしなところで文節が区切られてしまいます。ツールに読み込んだ後で文節をつなげるといったことも可能ですが、量が多い場合には、翻訳作業に支障をきたします。不要な改行はツールに取り込むまえに消していく前処理が必要となります。

(Word上で不要な改行が入った状態)



(翻訳支援ツールに読み込んだ例)



ほかにも、原稿内に画像データが貼りつけられている場合などはツールには読みこめないため、別途処理を進める作業が必要となります。ツールによって、あらかじめそういった部分を視覚的に確認できる機能がありますので、ご活用頂けると良いかと思えます。

さいごに

今回はCATツールご利用前の豆知識をお伝えしました。

「前処理」や翻訳メモリの作成の時間・費用を考えると、翻訳支援ツール＝スルッと即効率化とはならない場合も多々あるかと思えます。まずはフローを考える必要もでてくるかもしれません。

ですが、導入効果は長期視野で見えていくことをお勧めします。特に翻訳メモリについては、過去の翻訳資産を埋もれさせてしまいか、生かして今後の品質の安定化・効率化のために使うか、この判断は大きいように感じます。

次回以降は、形式や解析について等、CATツールのマニアックな世界をお伝えしていきます。

Writer Profile

加藤 じゅんこ
Kato Junko



Memsorce(メムソース) Marketing Manager (Japan) 早稲田大学大学院文学研究科西洋史専修修了。外資系医療機器の会社にて広報担当。突発的にWebデザインを学び、翻訳学校に通った後、翻訳会社に転職。教育・テクニカルサポート・サポートツール開発・業務フロー改善といった様々なCATツール関連業務に携わる。2015年8月よりMemsorce Certified Trainerとしてトレーニング・コンサルティングサービス実施、2016年2月より現職。地元さいたまにて、「もう一度英語をやる」大人向け英文法講座ものんびり楽しく開催中。

帽子屋の辞典十夜

高橋 聡

実務翻訳者

第1回 「Webster辞書のなぞ」

辞書は翻訳者にとって不可欠な道具です。最近、ほとんどの辞書がなんらかの形で電子データになっており、翻訳者にとっての辞書環境は、これまでになく快適になりました。私は、2015年の春先くらいから「辞書をうまく使いこなそう」という共通テーマのもと、あちこちで話をしたり記事を書いたりしています。電子データといっても、どんな形式があるのか。それを「串刺し検索」するための「辞書ブラウザ」は、どう使えばいいのか。それぞれの辞書にはどんな特徴があるのか、といったことです。詳しくは、『できる翻訳者になるために プロフェッショナル4人が本気で教える 翻訳のレッスン』（講談社、5/27刊行予定）をぜひお読みください。

ただ残念なことに、どの場でも紙面や時間に制約があるため、ひとつひとつの辞書の歴史や特徴を詳しくご紹介することはできません。そんな折、編集委員を務めているこのJTFジャーナルが誌面刷新となり、連載枠をもつ機会に恵まれました。これから10回にわたり、翻訳者がよく使う辞書について、その成り立ちや特色を綴って

いこうと思います。

シリーズ第1回は、「Webster」という名の付いた辞書にまつわる話です。

英語の世界で頂点に立つ辞書といえば、イギリス英語では『Oxford English Dictionary』（通称OED）、アメリカ英語ではWebster、というのはわりと知られています。では、Amazon (co.jpでもcomでも)でWebster Dictionaryというキーワードを検索してみてください。いろいろヒットします。どれがいわゆる「Webster辞書」だか、おわかりですか？

商品数が膨大なのは、判型や版の違い、対象読者別（Children'sなど）、英語以外の言語用などがあることも理由のひとつです。が、注意して見てみると、Merriam-Webster という名前や右のようなロゴが入っているものと、それ以外に大別されることもわかってきます。「それ以外」で代表的なの



が、NEW WORLDという名が付く辞書と、Random House Webster's という名が付く辞書です（どちらも、今ではそれぞれ権威が確立しています。ちなみに、Random House Webster's Unabridged Dictionaryは、『ランダムハウス英和大辞典』の元になった英英辞典と同じ内容です）。

実は、Websterという名前にはなかなか厄介な歴史があります。

Webster辞書の生みの親はNoah Webster (1758-1843) といい、小辞典の編纂を経て、1828年に最初の大辞典を出版します。これが

An American Dictionary of the English Language (初版、1828)

です。2巻本で語彙数は73,000語だったそうです。今の私たちが知っているアメリカ綴り（centreではなくcenterとか）が、この辞典で確立しました。売れ行きはいまひとつだったようですが、1841年には第2版が出版されます。

An American Dictionary of the English Language (第2版、1841)

2年後の1843年にWebsterが死去すると、娘婿のGoodrichという人が編纂を引き継ぎ、著作権とWebsterの名は最終的にGeorgeとCharlesの兄弟が経営するMerriam社に売り渡されました。これが、今日まで続くMerriam-Webster社の前身で、ここから1847年に大改訂版が出ます。名前は

An American Dictionary of the English Language (1847)

と変わりませんでした。この辞書の1854年版のときに初めて、背文字にUNABRIDGEDという名前が入ったそうなので、名実ともに「大辞典」と呼んでいいのはこのあたりからでしょう。そして、そのUNABRIDGED「大辞典」の流れを受けてひとつの完成を見たのが、

1864年版でした。
An American Dictionary of the English Language (1864)

背文字には、UNABRIDGED/NEW ILLUSTRATEDという文字が入っており、収録語彙数は118,000。幕末の日本で、ジョン万次郎（中浜万次郎）や福沢諭吉が持ち帰ったWebster辞書は、だいたいこの頃のUNABRIDGED版のようです。

ここまでが、言ってみればWebster辞書の前半の歴史です。大きい転換点になるのは、1847年版の著作権が切れた1889年です。それまでも、Websterの名を合法的に冠した辞書は中小の出版社からたくさん出ていたのですが、Websterの名が登録商標されていたため、1889年を境に合法・非合法を含め、Websterと名の付く辞書が濫造されてしまいます。日本で言えば、「広辞苑」という名前を国語辞典の代名詞のように自由に使えるようになり、「角川広辞苑」とか「ベネッセ広辞苑」が出てきたような状況でしょう。その一方ではCentury Dictionaryなども登場し、19世紀末のアメリカでは辞書戦争が繰り広げられます。本家Merriam社がそれに対抗して展開したのが、「国際版」、そしてその後の「新国際版」の系列です。

Webster's International Dictionary of English Language (1890)

Webster's International Dictionary of English Language (増補、1900)



Webster's New International Dictionary of English Language (第1版、1909)

Webster's New International Dictionary of English Language (第2版、1934)

収録語彙数は、New Internationalの第2版で60万4,000にもなりました。そして、このシリーズの第3版

Webster's New International Dictionary of English Language (第3版、1961)

が、私たちが直接知っている、いわゆる「Websterの大辞典」です（写真）。語彙数は大幅に減った約45万語。このとき本国では、第3版の編集方針をめぐる大論争が起きています（百科項目が大幅に削られた、規範的でなくなった、など）。

発行からもう55年も経っていますが、今のところこれが「最新版」です。かつては、この第3版の電子データ版も出ていましたが、今ではほぼ入手できません。かわりに、オンライン版に移行し、そこで改訂作業も続けられています。それが、Unabridgedという名を冠したMerriam-Websterの有料サイト (<http://unabridged.merriam-webster.com/>) です。International 3rd相当のデータも最近の新語（たとえば、carbon footprintなど）も引くことができます。

このほか、Merriam-Websterから刊行されていて、今も手に入る代表的な辞書が

Merriam-Webster's Collegiate Dictionary

です。中辞典に相当する規模で、最新版は第11版。このCollegiate相当のデータも、オンラインで引

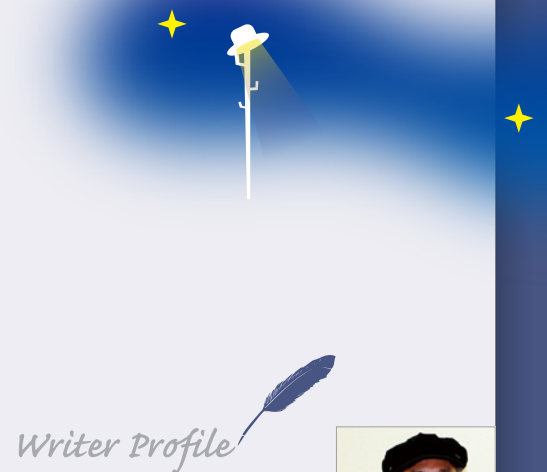
くことができます (<http://www.merriam-webster.com/>)。無料で使えるうえに、新語も追加されつつあるので、ぜひ活用したいところです。

もうひとつ、LogoVista社からは『メリアム・ウェブスター英英辞典』という商品が出ていますが、よく見ると原題は

Merriam-Webster's Advanced LEARNER'S English Dictionary

で、こちらは学習英英ですので注意してください。

なお、Merriam社は、元祖Webster辞書の出版元という立場を守るために、1982年に社名を今のMerriam-Webster Inc.に改め、さらに1991年にはMerriam-Websterという合成語を商標登録しています。新しくWebsterを自称する辞書は、さすがに出てこなくなったようです。



Writer Profile

高橋 聡
Takahashi Akira



CG以前の特撮と帽子をこよなく愛する実務翻訳者。翻訳学校講師。学習塾講師と雑多翻訳の二足のわらじ生活を約10年、ローカライズ系翻訳会社の社内翻訳者生活を約8年経たのち、2007年にフリーランスに。現在はIT・テクニカル文書全般の翻訳を手がけつつ、翻訳学校や各種SNSの翻訳者コミュニティに出没。最近、翻訳者が使う辞書環境の研究が個人的なテーマになっている。

ブログ「禿頭帽子屋の独語妄言」

<http://baldhatter.txt-nifty.com/trados/>

『何でも 教えて キカク』

田 蔦 奈 々

JTF/ISO規格検討会 翻訳プロジェクトリーダー
株式会社翻訳センター 品質管理推進部 部長

ISO17100 認証取得に 必要な準備

2015年5月に翻訳サービスの国際規格ISO17100が発行されたことは皆さんご存知でしょう。今年度から、ISO17100を中心しつつも、他の規格の情報も盛り込んだ内容で連載記事を書かせていただきます。今回は、弊社の認証取得の経験に基づき、今後認証の取得を目指す翻訳会社の方々にとって参考となる情報をまとめました。規格の概要は過去の記事(JTF JOURNAL #280)をご覧ください。

どここの認証機関を選ぶか

ISO17100の認証を取得したいと考えた場合、どのような選択肢があるかご存知でしょうか。認証を取得するには認証機関の審査を受けなければなりません。認証機関は国内外にいくつかあります。国内の翻訳会社だからといって、国内の認証機関の審査を受けなければならないという決まりはありませんが、海外の審査機関を選択した場合、旅費・宿泊費を請求されますし、手順書やエビデンス類を翻訳しなければなりません。国内の認証機関に依頼するのが手取り早いでしょう。国内では選択肢

はひとつしかありません(日本規格協会)。

日本規格協会に審査を依頼する場合のデメリットは、現在のところ日本規格協会は、英日と日英の言語方向の認証しか行っていないという点です。ISO17100自体はあらゆる言語方向を対象とした規格ですが、他言語の審査を行える体制が整うまで日本規格協会では認証の言語方向を制限している状況です。多言語展開をしている翻訳会社であれば、費用や手間がかかっても、他言語を取り扱う海外の認証機関を検討してもよいでしょう。海外の認証機関ではオーストラリアのLICSが有名です。

認証取得の第1ステップ： 認証範囲と分野を決める

規格を購入して内容を把握してから一番にすべきことは、認証取得の範囲を決めることです。認証は会社単位ではなく、拠点、部署、チーム単位で取得が可能です。認証に係る費用は取得の範囲、言語方向、分野に応じて算出されますので、認証取得が最初から無理だと分かっているチーム(ISOのプロ

セスを完全に逸脱するチーム)は予め対象から外しておくのが賢明です。複数の拠点や部署があっても、基本的に同じプロセスを採用しているなら、審査時に行うべきプロセスの説明は一回で済みますから、一度に認証を取得した方が手間も費用も少なく済みます。ちなみに分野は下記の中から好きなものを選択できます。分野が増えるごとに費用も追加されます。

- ▶ 金融・経済・法務
- ▶ 医学・医薬
- ▶ 工業・科学技術
- ▶ 特許・知財
- ▶ その他

第2ステップ： 責任者を任命する

取得の範囲が決まったら、責任者を設置しましょう。規格は曖昧な記述が多いのですが、規格の遵守を証明する義務は翻訳会社側にあります。各要求事項の遵守をどのように証明するかを決め、現場に落とし込みます。決めたルールが遵守されていることを定期的に監査できると安心です(義務ではありません)。例えば、翻訳者の自己点検が要求事項となっていますが、その実施を証明する手段として、翻訳者にチェックリストを提出させるのか、あるいは点検前後の履歴ファイルを提出させるのかといったことを決めます。チェックリスト提出を定めたなら、プロジェクトごとにチェックリストがエビデンスとして保管されていることを確認します。該当の翻訳者から提出されたことが分かるようにチェックリストが添付されたメールそのものを保管するなど、工夫が必要です。

責任者の数は会社規模や取り扱い分野・言語にもよりますが、社員が約30名の規模であれば1名で十分です。プロセス全体を把握できるという意味でPM経験者が適任です。100名規模の会社であっても、事務局といった大袈裟なものが必要なく、責任者が2名ほどいれば十分です。

第3ステップ： プロセスの見直し

責任者に任命された方は、規格に照らして社内プロセスで抜け・漏れがないかを確認します。特に注意したいのは以下の点です。

- ▶ 翻訳者に自己点検を課しているか。
- ▶ 翻訳後に原文と訳文とを突き合わせた校正（規格では「バイリンガルチェック」という）を行っているか。
- ▶ 納品前に検品を行っているか。

自己点検、校正、検品について、具体的にどのような項目を盛り込むべきかの規定はありませんので、各社で実施項目、方法、基準を作成して構いません。プロセスを確実に実施することと同じくらい大切なのは、実施を証明するエビデンスをどのように準備しておくか、ということです。弊社では、校正実施を証明するため、社内に校正結果を記録するシステムを用意しました。立派なシステムを用意できない場合は、エクセルシートを関係者で共有するような形でも構わないと思います。社外の方には校正記録シートを納品の際に添付していただく運用にしています。

多くの翻訳会社がISOに準拠しないプロジェクトも扱うと思いますので、準拠プロジェクトとそうでないものを明確に区別する手段も用意しておくようにしてください。

第4ステップ： 適合翻訳者等の選定

プロセスが整理できたら、翻訳者、校正者、PMが力量と資格の要求事項を満たすかどうかの確認作業に入ります。規格には必要な力量の種類について記載がありますが、どの程度の力量が必要なのかは記載がありません。各社が独自に評価方法と基準を定め、記録を保持すればよいでしょう。力量の維持管理も要求事項になっていますので、年一回、評価結果を更新

して記録する仕組みを作ってください。

翻訳者や校正者の資格については、学位や経験年数を証明する必要があるため、卒業証明書を集めたり、発注実績を記録しておいたりする必要があります。翻訳会社が翻訳者に代わって実績を証明することができれば、翻訳者に負担をかけなくて済みます。

確認の結果、要求事項を満たさない翻訳者が出てきたとしても、ISO準拠が求められるプロジェクトを担当してもらうことができますので、登録を解除する必要はありません。適合翻訳者と明確に区別できるような仕組みを考えましょう。

第5ステップ： 社内説明会の開催

第4ステップが終わったら、次は運用ルールや適合翻訳者の見分け方を関係者に周知します。社員が規格の内容すべてを理解する必要はありません。責任者が決めたルールの遵守を徹底させるための教育をしてください。自社独自の用語（プロセス名）を規格に合わせて変更する必要はありません。自社独自の用語が規格ではどの用語に該当するかを責任者が把握し、審査時に説明できれば構いません。

第6ステップ： 運用の開始と実施確認（監査）

さて、ここまできたら運用を開始するのみです。審査までに抜き取り検査を実施して運用状況を確認しておくことよいでしょう。PM 1名につき最低でもプロジェクト1件をサンプリングし、エビデンス類を提出させます。審査当日は適合プロジェクトの中からランダムにサンプリングが行われ、エビデンス提示が求められますので、予行演習とってください。審査の申請までに2か月ほど運用を回せていれば、大丈夫でしょう。

審査にかかる時間と費用

社内の整備状況にもよりますが、検討開始から申請まで6か月みておけばよいと思います。1年以上かけるようでは長すぎではないでしょうか。短期間で集中して取得することをお奨めします。申請から審査まで1か月、審査から認証取得まで2か月はかかると思っておいてください（混雑状況に左右されます）。

認証取得の費用は工数に基づき計算されます。日本規格協会に審査を依頼する場合、東京都内の会社であれば、規模がそれなりに大きく（社員400名）、すべての分野で認証を取得したとしても、50万円前後でおさまるのではないのでしょうか。詳しくは審査機関に直接お問い合わせください。

国内で認証を取得した組織

2016年2月現在、日本規格協会から認証を取得したのは7社です（個人事業主を含む）。通常、認証を取得した組織の情報（会社名等）は審査機関のホームページで公開されますのでご興味のある方はご確認ください。

次回のお知らせ

今回は審査までの準備について説明しましたが、次回は審査当日の流れをご紹介します。

Writer Profile

田島 奈々
Tajima Nana



兵庫県出身。神戸市外国語大学イスパニア語学科を卒業後、貿易会社での勤務を経て、(株)翻訳センターに入社。メディカル分野のチェッカーとして約10年間の経験を積んだ後、2012年以降は社内の品質管理責任者として全社的な仕組みづくりを担う一方で、日本翻訳連盟の会員企業の一員としてISOの国際標準化活動（特に翻訳サービスに関する国際規格ISO17100の策定）に携わっている。



翻訳品質の ランチボックス

西野 竜太郎

フリーランス翻訳者/ソフトウェア開発者

翻訳の「品質」とは(1)

翻訳業界の さまざまな「品質」

翻訳会社やフリーランス翻訳者のウェブサイトを見ると「高品質の翻訳」といった言葉を目にします。では翻訳の「品質」とは何でしょうか？誤訳がない、専門用語をきちんと使っている、読みやすい日本語で書かれている、などさまざまな要素が考えられます。ある翻訳案件が発注されてから最終的に読まれるまでには、ソース・クライアント、翻訳会社、翻訳者、最終読者という立場の人たちが主に関係します。例えば、あるソフトウェア会社のウェブサイト上にマニュアルの和訳が掲載され、この翻訳の「品質」について4者がそれぞれの立場から以下のように評価したという状況を想像してみてください。

- ・ 最終読者：「マニュアルで『である調』は読みにくい。だから低品質」
- ・ クライアント：「社内スタイルガイドに従って『である調』にした。だから品質基準は満たしている」

- ・ 翻訳会社：「この納期と料金で対応できるのはここまで。だから品質は十分」
- ・ 翻訳者：「この分野で10年の翻訳経験がある。だから品質には自信がある」

どの評価も一理あるように思えます。しかしそれぞれの「品質」の中身が異なっていて、4者が品質について議論したとしても話が噛み合いそうにはありません。同じ和訳の品質について語っているのに、さまざまな視点からの評価がなされているのです。翻訳業界で働いていれば、これほど明確ではないにしても「何となく話が合わないな……」と感じる経験をする人もいないのでしょうか。実のところ翻訳業界では、翻訳サービスの「プロセス」に関する国際的な合意は存在する (ISO 17100) もの、翻訳成果物である「プロダクト」の品質評価について幅広い合意はありません。上記のようにそもそも品質が何を指すのかという基本部分で意見の相違があり、容易に統一した定義や基準を作れないことが一要因ではないかと考えられます。しかし現

実にはクライアントと翻訳会社との間、あるいは翻訳会社と翻訳者との間で、プロダクトの品質について何らかの評価が行われています。力のある発注側が評価基準を提示することも、長年の取引で徐々に評価基準が形成されることもあるでしょう。ところがそういった基準は別のクライアントや翻訳会社にも通用するとは限りません。新規開拓したクライアントが使う基準は既存取引先のものとは異なることも往々にしてあるのです。特に翻訳ビジネスではその性質上、慣習が違う海外企業との取引も発生します。そのため、プロダクトの品質と評価に関する国際的な基準が確立されれば、翻訳ビジネスはより円滑に進むようになるかもしれません。

Garvinの5分類

このような状況の中、2014年にFieldsら業界関係者が翻訳品質に関する論文(※注1)を発表しました。FieldsらはGarvinという経営学者による論(※注2)を参考にし、翻訳の「品質」を5つに分類したのです。この5つを順に説明します。

A. 超越的

超越的 (transcendental) とはもともと哲学の言葉です。良い文章に多く触れるといった経験を通して培われた力によって、品質の良し悪しを直観的に判断するというアプローチです。いわゆる職人技に近いでしょう。客観性に欠けるという批判はありそうですが、産業翻訳であっても言葉の美醜など主観的な判断が必要になることがあるので無視できません。

B. プロダクトベース

製品やサービスの品質は原材料や特質によって計測が可能というアプローチです。例えばGarvinは品質の高いアイスクリームには乳脂肪分が多く含まれるという例を挙げています。計測可能な数値を

用いるため、製品やサービスどうしの比較もできます。

C. ユーザーベース

製品やサービスの品質は、ユーザーのニーズ、要望、好みを満たしている度合いによって決まるというアプローチです。翻訳であれば、最終読者からの見方だと言えるでしょう。

D. 生産ベース

あらかじめ定めた要件や仕様をどの程度満たしているかで品質が決まるというアプローチです。ユーザーベースとは逆に、クライアント、翻訳会社、翻訳者といった生産側あるいは提供側からの見方になります。(※注3)

E. 価値ベース:

費用と便益 (cost and benefit) で品質を測定するのが価値ベース (value-based) のアプローチです。便益が費用に比べてより大きいなら、製品やサービスにより価値があり、そのため品質もより高いと考えます。仮にプロダクトベースで品質が高いと判断されたとしても、もし費用も大きいなら、この価値ベースでは品質は相対的に低くなります。

さまざまな品質の分類例

Garvinは、「品質」の定義のほとんどはこの5つのどれかに分類できると述べています。本記事の冒頭で、立場の違う4者がマニュアル和訳の品質を評価するという例を示しました。この4者の主張をGarvinの方法で分類してみます。矢印の後に分類名を記載します。

- ・ 最終読者:「マニュアルで『である調』は読みにくい。だから低品質」
→ ユーザーの好みなので、ユーザーベース
- ・ クライアント:「社内スタイルガイドに従って『である調』にした。だから品質基準は満たしている」
→ 仕様に従っているので、生産ベース
- ・ 翻訳会社:「この納期と料金で対応できるのはここまで。だから品質は十分」
→ 費用との兼ね合いなので、価値ベース
- ・ 翻訳者:「この分野で10年の翻訳経験がある。だから品質には自信がある」
→ 経験による直観なので、超越的

このように、4者の品質評価はGarvinの方法で分類できそうです。上記にはプロダクトベースが出てきませんでしたが、例えばクライアントや翻訳会社が「用語集違反やスタイルガイド違反が少ないので高品質」と評価した場合が該当するでしょう。用語集やスタイルガイドの違反数という測定可能な数字を用いているためです。

品質に関する議論の共通基盤に

では、翻訳の「品質」が分類できるとどのような利点があるのでしょうか。最も大きな利点は、翻訳品質に関する議論の共通基盤になり得るということでしょう。これまで翻訳業界内でも品質について議論が噛み合わないようなケー

スが見られました。上記の4者の例以外にも、例えば機械翻訳の品質を議論する場面が挙げられるでしょう。機械翻訳はおかしな訳文を出すことがあるので、超越的アプローチやユーザーベースのアプローチで評価した場合に品質が高いとは言えません。しかし費用が安い点を考慮して品質は十分だと考えるのであれば、それは価値ベースのアプローチです。業界イベントなどで機械翻訳の話題が取り上げられると、紛糾する場面も見られました。しかし相手が前提としている「品質」が違うという点を認識しておけば、より生産的な議論に発展させることもできるでしょう。つまりGarvinの5分類は、少なくとも品質についての議論をする際の共通基盤となるのではないのでしょうか。



Writer Profile

西野 竜太郎
Nishino Ryutaro



IT分野の英語翻訳者でソフトウェア開発者。TAUS Representative、JTF標準スタイルガイド検討委員、情報処理学会DC研究会運営委員も務める。情報システム学修士(専門職)。著書『アプリケーションをつくる英語』で第4回プログロ大賞(電子書籍部門)を受賞。雑誌記事に「Learning localization in context」(MultiLingual誌 2013年12月号)など。趣味はジャズ鑑賞とアニメ鑑賞。

注1: Fields, P., Hague, D., Koby, G. S., & Melby, A. (2014). What Is Quality? A Management Discipline and the Translation Industry Get Acquainted. *Revista Tradumàtica*, (12), 404–412.
注2: Garvin, D. A. (1984). What Does “Product Quality” Really Mean? *Sloan Management Review*.
注3: Fieldsらは「production-based」という言葉を使っていますが、Garvinのオリジナルでは「manufacturing-based」です。

翻訳者のための Word 導入

新田 順也

ブログ「みんなのワードマクロ」管理人

Wordの初期設定

これから2年間にわたりWordを翻訳で徹底活用する方法を紹介いたします。毎日使うWordだからこそ、長期的に見れば小さな工夫が大きな効果を生みやすいと思います。読者のみなさまからの質問やご要望にもお応えしていきたいと思っています。

作業をイメージしながら機能を覚える

私たち翻訳者は書類をゼロから作るわけではないので、たくさんWordの機能をやみくもに覚える必要はありません。「多くの機能をなんとなく知っている」のではなく、「翻訳に必要な機能だけは自在に使うことができる」という状態がよいと思います。自分が必要とする機能だけを少しずつ使いながら覚えていきましょう。

機能を覚えるときに、その機能をどのような作業で使えるのかをイメージしておく、後で必要になったときに思い出しやすくなると思います。

まず手始めに環境設定

Wordという仕事環境を整えることは重要です。いくつかの設定方法を紹介いたします。

リボンを最小化する(折りたたむ)

Word 2007以降では、リボンを常に折りたたんで作業領域を広くしておくことをお勧めします。リボンのタブをダブルクリックするか、ショートカットキー([Ctrl] + [F1])を用いることで、リボンの最小化・展開ができます。これだけで、今までよりも縦方向に数行分多くの文字を表示できるようになります。

リボンを最小化すると編集作業用のボタンをクリックしにくくなりますので、クイックアクセスツールバーの活用方法もぜひ学んでください。

クイックアクセスツールバーはOffice製品共通の機能です。ここに特定の機能のボタンを自由に配置できます。ボタンの登録も削除も右クリックだけでできます。ウェブで検索すると例が出ていま

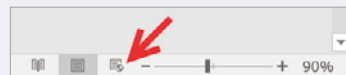
すので、ぜひお試しください。

Webレイアウトの活用

Wordは、「印刷レイアウト」という表示方式をデフォルトの設定として使用しています。印刷イメージを確認しながら編集ができるレイアウトです。

ところが、「印刷レイアウト」で表示倍率を上げると、画面に1ページの横幅が収まりきらなくなり、結果的に水平スクロールバーをスライドしないとページを表示できなくなることがあります。ここでは作業がはかどりません。

ここで活躍するのが「Webレイアウト」です。画面右下にあるボタンをクリックするだけで使えます。このレイアウトにすると、画面の幅に応じて自動的に文字が折り返されます。その結果、水平スクロールバーを使わなくても、文字列を常に画面内に表示できるので



印刷時のレイアウトを気にせずに訳文を作成できるのであれば、ぜひ「Webレイアウト」をお試しください。デフォルトの「印刷レイアウト」に戻す場合には、ショートカットキー([Alt] + [Ctrl] + [P])を押下してください。

さらに縦方向の行数を増やす

もし水平スクロールバーがいないのであれば、隠してしましましょう。これで作業領域が1行分増えます。

[オプション] ダイアログで設定します。ショートカットキー([Alt] → [T] → [O]) 3つのキーを1つずつ順番に押下します)によりこのダイアログを開きます。このダイアログで、[詳細設定] > [表示] > [水平スクロールバーを表示する]をオフにします。(画面1)

これで、作業領域が広くなり快適になりました。次に、文字情報を正確に表示する方法を2つ紹介します。

編集記号を表示する

私たちは、プロとして文字情報を扱いますから、全角スペースや半角スペースの違いには敏感になりたいところです。文章中の空欄が全角スペースなのか半角スペースなのか、はたまたタブなのかは、目視では判断できません。この場合、編集記号を用います。

編集記号の表示・非表示の切替えには、ショートカットキー([Ctrl] + [Shift] + [8])を使います。セクション区切りや改ページなども表示されます。セクション区切りを誤って削除してしまうと、ページのレイアウトが崩れるなど不具合が起こります。このようなことが起こらないように、編集記号を全て表示した状態で作業しましょう。

フィールドを網かけ表示にする

このほかにも、「フィールド」で書かれた文字列を「網かけ表示」にしておく情報が「見える化」されて、安心できます。

Wordには、参照先の図表番号、見出し名、ページ番号等を表示させる「フィールド」という仕組みがあります。マニュアルなどの長文ドキュメントで 사용되는機能です。

わせると、プロのようなできます (図 3)。たとえば、一致

Wordのデフォルトの設定では、フィールドの文字列にカーソルを置くまではフィールドが使用されていることに気づけないことがあります。フィールドの箇所を明示しましょう。

これも、[オプション] ダイアログにて変更します。[詳細設定] > [構成内容の表示] > [フィール

ドの網かけ表示] のプルダウンメニューで [表示する] を選択します。(画面2)

インサートキーの無効化 (Word 2007以降)

最後に紹介する技は、誤入力を防止するのに役立つ設定方法です。キーボードのレイアウトによっては、[Insert] キーが [Backspace] キーの右隣にあり押し間違いの原因になりえます。「挿入モード」で文字入力をしているつもりが、[Insert] キーを知らぬ間に押下してしまい、「上書きモード」になっていたなんて経験はありませんか？ Word 2007以降は、この [Insert] キーを無効化できます。これも [オプション] ダイアログで設定します。

[詳細設定] > [編集オプション] > [上書き入力モードの切替えに Ins キーを使用する] をオフにします。また、[上書き入力モードで入力する] もオフにします。(画面3)

今回は、Wordの環境設定に関して紹介しました。次回以降、文字入力や検索方法など、より具体的な便利技を少しずつ紹介していきます。

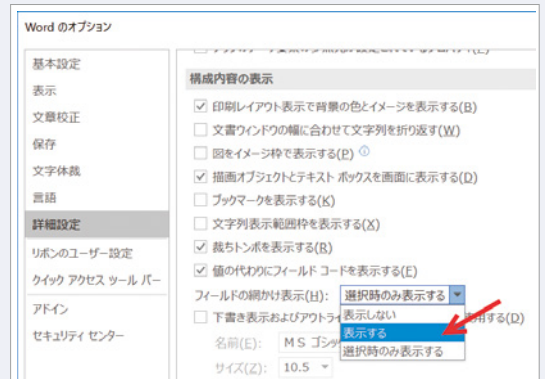
希望するテーマがあれば、以下のメールアドレスにご連絡ください。

nit@n-i-t.jp

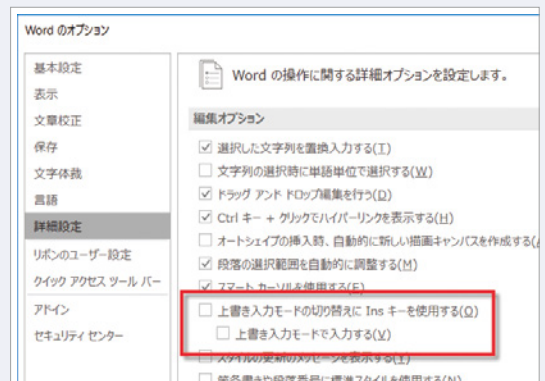
みなさまと一緒に連載を作っていけるとうれしく思います。



画面1



画面2



画面3

Writer Profile



新田 順也
Nitta Junya

特許翻訳者、Wordアドイン開発者、Wordのセミナー講師。エンジニアリング会社、特許事務所を経て独立。ブログで数百のWordマクロを公開。翻訳をする傍ら、翻訳会社、マニュアル制作会社、電機メーカー、特許事務所等々のクライアントにWordのカスタマイズやWordマクロ活用のコンサルティングを実施。2011年から毎年Microsoft MVPをWord部門で受賞。代表ソフトは、Wordで動く翻訳チェックソフト「色deチェック」。

■ブログ「みんなのワードマクロ」
<http://ameblo.jp/gidgerock/>

機械翻訳の近未来

本間 奨

日本特許翻訳株式会社 代表取締役

第1回 ドキュメント翻訳

1. はじめに

機械翻訳の歴史は、電子辞書やコーパス辞書を利用した「支援ツール」的なものから、翻訳結果を人が修正をおこなうことを前提としたPC翻訳ソフト、さらに大規模サーバーによる翻訳代理実行としての「自動翻訳」へと発展してきました。

とくに「自動翻訳」を活用して成功した事例として、特許情報の分野があります。グローバル化の流れの中で、国内特許のみならず、海外の特許調査が必須になってきており、英語、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語などで記載された先行技術となる特許公報を理解したうえで、特許出願したり、他社特許を調査することが必要になってきています。

日本の特許庁やヨーロッパ特許庁などでは、特許庁の提供する特許情報検索システムに、機械翻訳された外国公報が表示されるようになってきました。また民間サービス業者の提供する特許情報検索システムでも機械翻訳が用いられています。

このように膨大な特許文献の機

械翻訳は、自動翻訳が実用化され成功した事例であり、その結果、機械翻訳によって作成された外国特許公報を、世界中のサーチャーが利用して特許調査を行っています。

2. ドキュメント翻訳

この連載のテーマですが、特許分野ですでに実用化されている「自動翻訳」技術を用いて、1つの可読な文書全体を翻訳して、オリジナルの文書のレイアウトで翻訳ドキュメントを返す「ドキュメント翻訳」についてお話していきたいとおもいます。

「はじめに」で述べた外国特許公報は、xmlで記述されています。xml文書をそのまま翻訳しているので、これもドキュメント翻訳の1つと考えられなくはないのですが、オリジナル文書が人間可読ではないので、今回のドキュメント翻訳からすこし外れます。特許公報の場合は、あえてオリジナル文書を翻訳システムにインプットする必要はなく、公報番号のみ指定すれば、各国の発行済みのxml公報から翻訳するほうが簡単で、かつ複数の公報を一括翻訳指定することが可能なので便利になります。

ドキュメント翻訳のオリジナル

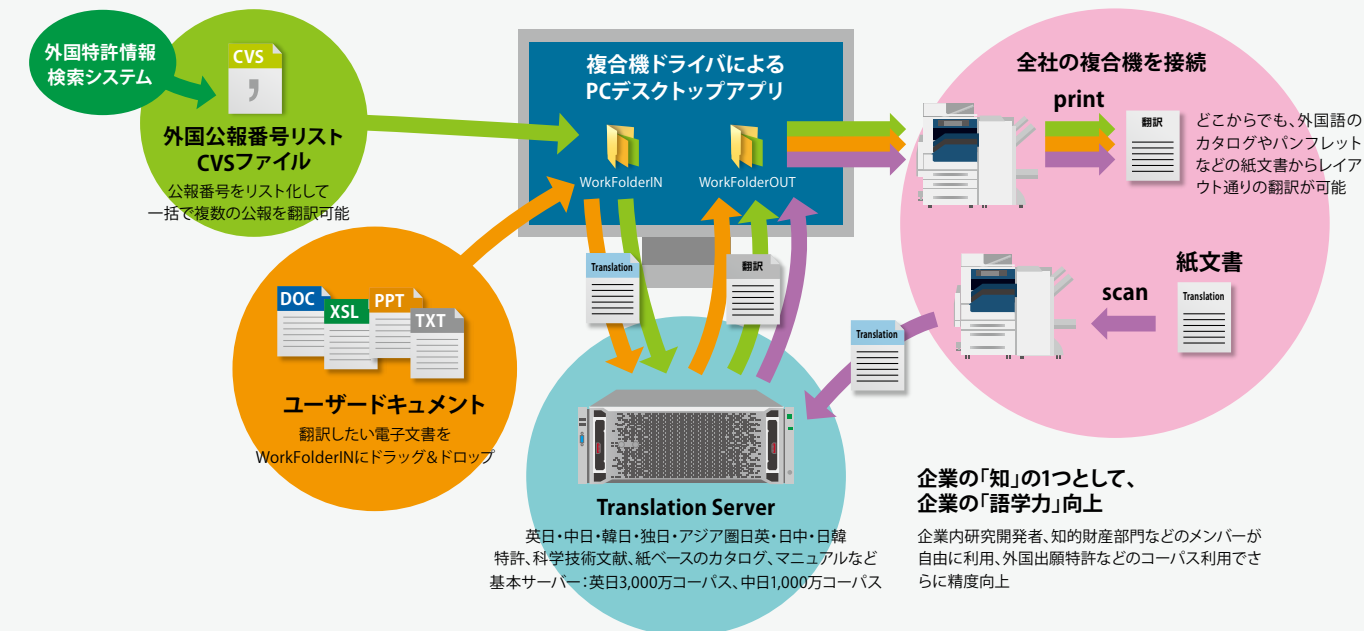
は、人間可読のドキュメントで、その形態はカタログやパンフレットなどの紙媒体から、pdfやワードなどの電子文書までさまざまな形態が考えられます。これらのドキュメントの形態に関係なく、企業内の研究開発者やマネージャーや知的財産部門のメンバーが自由に「ドキュメント翻訳」を可能とすることで、企業のグローバルな情報収集力が大きく向上します。

すでに一部の事務機メーカーでは、おおよそ次ページ上のような構成で複合機をコアとした翻訳サービスの提供をはじめました。今後、Translation Serverが特許翻訳の技術を応用して進化していくものと考えられます。導入の当初は、用途は知的財産関連文書や技術文献、カタログ、マニュアル、仕様書などに限定されますが、企業内で大量に保有するコーパスがあれば適用範囲が広がると予想されます。

3. 全社情報インフラとしての Translation server と複合機

図のシステムは、全社情報インフラとしての Translation Server とその周辺機器としての複合機とユーザーPCとで構成されています。

オフィスの複合機は、かつての Fax/Copy/Printer としての Multi Functional (マルファン) 機から、現在ではドキュメントソリューション端末として進化してきました。この大きな流れの中で、翻訳機能の獲得が大きな課題でした。複合機による翻訳とは、外国語のパンフレットなどを原稿台にセットして、コピーボタンを押すと同時に翻訳されたハードコピーが出力されるというものです。このような1秒程度での翻訳速度はここ1~2年では実現できそうもありませんが、コピーボタンをおして、自分の席のPCに「読んで分かる」翻訳結果が数分後には格納されるようになると予想されます。



4. Translation Server

図のTranslation Serverですが、「読んで分かる」翻訳結果を得るために、特許翻訳で成功した語順変換統計的機械翻訳(SMT)方式を採用することが考えられます。語順変換SMTで実際に用いられている翻訳エンジンのハード構成はLinuxサーバーとその周辺PCを含み、少なくとも64GBの実メモリと8core程度のリソースを必要とするもので、前後の処理を入れた複数サーバーによって構成されます。これをPC翻訳ソフトと比較すると、PC翻訳ソフトの実メモリで100倍以上、動作プロセス数でも10倍以上のプロセス数を必要とすることからわかるように、大規模なコンピュータリソースを必要とします。SMTは、従来のルールベース翻訳(RBMT)に比較すると、良質なコーパスが大量に存在すれば、高い翻訳精度を与えてくれます。特許分野では、外国特許出願時に翻訳された1,000万~3,000万という大量の比較的良質なコーパスが大量に利用できることから、SMTが最適です。実際、ヨーロッパ特許庁の機械翻訳エンジンはGoogle翻訳を用いています。日本特許庁でも、中国実案の機械翻訳では語順変換SMTに前処理・後処理を加えたハイブリッド

方式を用いています。

欧米圏内では言語間の語順が近いいため、SMTを用いたGoogle翻訳でも良好な翻訳結果を得ることが出来ますが、英日、中日のような語順が大きく異なる場合は、Google翻訳は「読んで分かりにくい」ことが多いようです。語順変換SMTを採用することで、はじめて質的に大きく精度向上し、これまでのルールベースやGoogle翻訳の出力文が「読んでみたが内容が理解しにくい」から、「読んでわかる」に変化するといわれています。

従って、現時点で、特許や技術分野を中心とする用途では、特許コーパスを搭載した語順変換SMTを用いたTranslation Serverが「ドキュメント翻訳」用として最も有力な候補といえます。

5. 連載記事での解説内容

この連載は、上の図を構成する要素技術それぞれにスポットをあてながら、以下の連載予定のサブテーマに関して、順次解説を進めていきます。

近未来を2年程度とすれば、連載終了時(2年後)に「語順変換SMTが官公庁や企業内Translation Server翻訳エンジンの主役となり、複合機と連携したドキュメント翻訳サービスが提供される日が

遠くない」という予測の結果がどうであったかをもって終わりたいと思います。これから2年間、よろしくお付き合いください。

- (第2回、第3回は「ドキュメントの基礎」について、xml、リッチテキスト、文字エンコードなどを解説します。)
- 第2回：ドキュメント形式の2つの代表的例：xmlとrtf(リッチテキスト)
- 第3回：SJIS、UTF-8、数値参照コード、欧文フォントなど翻訳にまつわる文字エンコード
- 第4回：複合機における給文字分離、レイアウト解析、OCR技術(複写機メーカーを取材予定)
- 第5回：ルールベースと統計的機械翻訳(SMT)の比較
- 第6回：機械翻訳の品質管理。翻訳チェッカーによる機械翻訳の品質チェック。
- 第7回：なぜ語順変換SMTが重要か？
- 第8回：NICTと日本特許庁の翻訳技術戦略
- (第9回、第10回は「ドキュメント翻訳の実際」について解説します。)
- 第9回：npat翻訳サービス
- 第10回：複合機と連携したドキュメント翻訳

Writer Profile

本間 奨

Honma Susumu



富士電機株式会社に感光ドラムの研究開発を行った後、富士ゼロックス株式会社で、有機感光体の開発・生産に携わり、2000年から特許情報検索システムDocuPatの事業立ち上げ・推進をおこない、その後日本発明資料にて語順変換統計的機械翻訳エンジンを用いた英日・中日翻訳システムMT Plusを開発、特許庁中国実案抄録翻訳事業に採用され、現在100万件以上J-PlatPatで利用されている。

2015年2月に日本特許翻訳株式会社を設立、昨年9月から大手企業中心に外国公報の多言語高精度機械翻訳サービスを提供している。最近では、pdfやワードの科学技術文献をレイアウト通りに翻訳するドキュメント翻訳サービスを開始した。

MT
Machine
TranslationTM
Translation
MemoryPE
Post-
editing

翻訳テクノロジーを学ぶ

～ 導入編 ～

山田 優

関西大学 外国語学部 /
外国語教育学研究科 准教授

本連載では『翻訳テクノロジー』について、毎回少しずつ学びます。1回目の今回は「導入編」として、翻訳テクノロジーとは何か、それを知る(不)必要性は何か、また本連載に至った背景について説明します。

『翻訳テクノロジーを学ぶ』

本連載は、動画コンテンツサイト『翻訳テクノロジーを学ぶ』^{注1}と連動しています。同サイトは日本通訳翻訳学会(JAITS)の翻訳通訳テクノロジー研究プロジェクトによって制作・運営され、主に大学生、大学院生、翻訳初心者を対象とする教育内容を提供しています。今回、JTFジャーナルと連携することで、教育上の相乗効果を期待します。最終的には動画および紙面をまとめて教材化／教科書化することを目指しています。

翻訳テクノロジーとは？

ここでは「翻訳に直接関係する(またはそのために設計された)テクノロジーとそれを用いた手法」とします。具体的には翻訳メモリ

などのコンピュータ支援翻訳ツール(CAT)、機械翻訳、または機械翻訳を使ったポストエディットやブリエディット、翻訳管理システムなどです。翻訳を効率化するためのマクロや用語集ツール、チェックツールも広義では対象になります。

翻訳テクノロジーという言葉は、CATツールの概念を包含するものです。英語はTranslation Technologyです。あまり聞き慣れない言葉かもしれませんが、2015年に『Routledge Encyclopedia of Translation Technology』という翻訳テクノロジーの辞典が出版されたことに鑑みても、一般的に認知されつつあると思います。

また本連載では、ツールのハウツーにとどまらず、その概念の歴史、背景、言語学／翻訳学との連関、社会的影響の総体として翻訳テクノロジーという言葉を用いることもあります。

翻訳と教育

日本の教育において、翻訳テクノロジーはおろか翻訳そのものを、そもそも大学・大学院で学ぶ

という慣習・歴史があまりありません。また、翻訳に必要な語学力を養うための言語教育においても翻訳教育が行われることは稀でした。しかし近年、この状況に変化が起きているようです。

まず、翻訳サービスを規定するISO17100が発行されたことにより、翻訳者の資格が意識されるようになりました。これを受けて大学教育機関での翻訳教育の資格が注目されているようです。日本の大学でも翻訳の授業やプログラムが増加傾向にあります(山田, 2015)。

また言語教育においても、これまでのコミュニケーションアプローチやCLT(Communicative Language Teaching)を中心としたモノリンガリズム(目標言語主義)一辺倒の状況に代わり、仲介能力mediationや翻訳能力translationを考慮した語学教育(TILT)が注目され始めています。

誰のためテクノロジーか？

教育状況の変化と翻訳テクノロジーとの関連は、テクノロジーは誰のためのものか、という議論にあります。翻訳テクノロジーの中には、一流のプロ翻訳者にとっては不要なものがあるかもしれません。例えば、機械翻訳などは、本当に翻訳を支援してくれるものなのか、という議論です。確かに、一流の翻訳者はその必要性を感じないかもしれません。逆に言えば、翻訳テクノロジーというのは、翻訳初心者や語学学習者にとってのみ有益なものかもしれないのです。

いずれにしても、テクノロジーの現状とそれを取り巻く業界は過渡期にあり、それゆえにテクノロジーの技術面だけを議論してもあまり意味がありません。「翻訳」のあり方をホリスティックに考慮し、そして将来の翻訳者像をも見据えながら考える必要があるでしょう。

MAHT vs. HAMT

では、前述の議論を少し深めるために Hutchins and Somers (1992) の図を援用してみたいと思います。

この図は、翻訳テクノロジーの進化を示しています。20年以上も前に書かれたものですが、基本的な状況は今とあまり変わりません。

図の一番右には、進化の起点として Human 人間翻訳が示されています。対局には Machine 機械翻訳がありますが、その下には Fully automated high quality (machine) translation (FAHQT/FAHQMT)、すなわち「完全に自動化された高品質の機械翻訳」と記されていることから、この状態はまだ実現していない理想の状況であることが暗示されています。つまり今の我々の状況は、Human と Machine の中間にある CAT (コンピュータ支援翻訳ツール) ということとなります。さらに、この CAT は、MAHT と HAMT の2つに下位区分されます。

Human に近い方にある1つ目は、MAHT (Machine-aided human translation) です。その名称からも

想像できるように machine-aided 機械に支援された human translation 人間翻訳ということで、この状況では人間翻訳に主眼を置いています。あくまで人間の翻訳を支援するのが機械ということになっています。具体例を挙げれば、(初期の) 翻訳メモリや用語集を使った翻訳が、このカテゴリに入ります。

これに対して HTMT (Human-aided machine translation) は human-aided 人間が支援する machine translation 機械翻訳になります。こちらは機械が翻訳を行うことに主眼が置かれています。具体的には、機械翻訳のポストエディットやプリエディット (本連載で後述) などが挙げられます。

すこし言葉が悪いですが、後者の状態では、人間は機械の尻拭いをするだけだという見方もできなくはありません。ただ、だからと言ってその人が機械に劣る能力かということそれは別問題で、むしろ非常に優れた翻訳者 (または修正者/校正者) であることが求められることもしばしばあります。

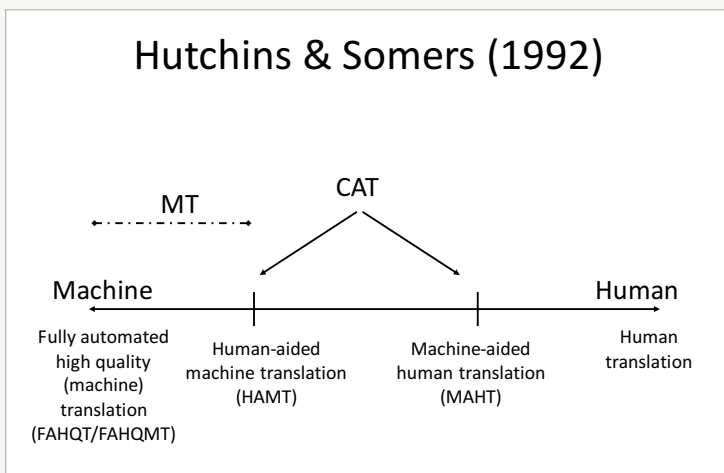
この図からも分かるように、今の私たちの議論は、人間翻訳主体の支援テクノロジーなのか、それ

とも機械翻訳主体のテクノロジーなのか、という視点の違いから生じていることもあります。技術との共生/共存を主張したとしても、上記のどちらに立脚した立場を取るかで、意見や考え方は変わってくるでしょう。

つまり、認識すべき問題は、テクノロジーはこの図のように進化するかもしれないが、人間というのは同じようには進化できない (かもしれない) ということなのでしょう。そうなのだとすると、翻訳者の役割は、Human、MAHT、HAMT の各カテゴリで異なるべきで、違った能力・特性・資格を有した人たちが担うべきだろうと推察できるわけです。一体、各々のカテゴリにはどのような翻訳テクノロジーが存在し、それらを操る人間翻訳者に求められるスキルは何なのか、を見極める必要があるわけで、それを学ぶ事が本連載の目的なのです。

翻訳通訳リテラシー

このように『翻訳テクノロジーを学ぶ』では、毎回テクノロジーの鍵概念について解説していきますが、前述のように、特定の技術を習得することが目的のではなく、技術の特徴や背景を理解して、俯瞰的に状況を見られる能力を涵養することにあります。このような能力を私たちは「翻訳通訳リテラシー能力」と考えています (武田・山田・辛島, 2014)。



注1: 『翻訳テクノロジーを学ぶ』 <http://www.apple-eye.com/ttedu>

参考文献

Hutchins, J., & Somers, H. (1992). Evaluation of MT System. In An introduction to machine translation. Academic Press.

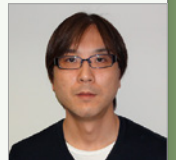
武田珂代子・山田優・辛島デイビッド (2014) 『「翻訳通訳リテラシー教育」の提案に向けて』『通訳翻訳研究』14, 1-14.

山田優 (2015) 『外国語教育における「翻訳」の再考 — メタ言語能力としての翻訳規範 —』『関西大学外国語学部紀要』13, 107 - 128.

Writer Profile

山田 優

Yamada Masaru



立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程修了。博士 (異文化コミュニケーション学/翻訳通訳学)。関西大学外国語学部/外国語教育学研究科准教授。日本通訳翻訳学会 (JAITS) 理事。社内通訳者・実務翻訳者を経て、最近は翻訳通訳研究に没頭する。研究の関心は、翻訳テクノロジー論 (MTPE など)、翻訳プロセス研究 (TPR)、翻訳通訳教育論 (TILT、TI Literacy) など。

WysiWyg

WysiWyg は設立時より、品質をもっと大切に考え、科学的に正確な、そして、お客様の望む翻訳を提供し続けてきました。

WysiWyg はこれから新しい翻訳の形にも挑戦してまいります。

まずは、新しい形の翻訳教室から…
→弊社 HP をご覧ください。

株式会社ウイスウィグ

<http://www.wysiwyg.co.jp/>

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-21-2 京橋第九長岡ビル6階
TEL 03-5566-1669 FAX 03-5566-4808



WORLD BUSINESS PARTNER

人・モノ・ビジネスを、世界と結びお手伝い

ida はアウトバウンド&インバウンドのビジネスを、多言語翻訳をベースに貢献しています。

- 「わかりやすい世界標準の英語」をベースに多言語展開の販促ツールから観光用のパンフの仕上げまで一元管理でスムーズに対応します。
- グローバル企業様向けに、多言語 CMS 活用のWEB サイト構築をご提案、運営を行います。
- 翻訳資産を最大活用できる最新の支援ツールを運用。多様な媒体でも用語統一されます。

アイ・ディー・エー株式会社

<http://www.idanet.co.jp/>

〒530-0051 大阪府北区太融寺町 1-17
TEL 06-6360-6300 FAX 06-6360-6303



株式会社 インターグループ
インタースクール

「言葉のプロフェッショナル集団」
インターグループは、50年にわたる信頼と実績を持つ異文化コミュニケーションのリーディングカンパニーです。

- フリーランス翻訳者募集
幾多の経験が培った「伝える能力と心」で、質の高い作品を私達と共に作り出して下さる方
- インタースクール 受講生募集
翻訳・通訳なら専門英語力が武器になる。卒業後のお仕事紹介まで。

是非弊社 HP をご覧ください。

株式会社インターグループ

<http://www.intergroup.co.jp/>

〒105-0001 東京都港区虎ノ門二丁目2番5号 共同通信会館4F
TEL 03-5549-6907 FAX 03-5549-3207



Chizai Corporation

◆フリーランス翻訳者常時募集中◆

知財コーポレーションは特許翻訳専門の翻訳会社です。特許翻訳は専門性が高い仕事であるため、フリーランス翻訳者の皆様に安心して取り組んでいただけるよう、当社では顧客の仕様に関する説明会や、翻訳チェック結果のフィードバックなどを行っています。より良い翻訳をするためには、翻訳者の皆様・顧客・当社が近い距離でコミュニケーションを取ることが大切と考えており、そうした環境を整えています。知的財産の世界で人材は常に求められています。ご応募をお待ちしています。

株式会社 知財コーポレーション

<http://www.chizai.jp/>

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-10-1 日土地西新宿ビル7階
TEL 03-5909-1181 FAX 03-5909-1183



技術翻訳
ジェスコポレーション

技術翻訳に特化したジェスコポレーションは

ひとりひとりが得意の専門分野を持ち

「原文の正確な理解」を心がけています。

●取り扱い言語●

英語、中国語、韓国語、ベトナム語、タイ語
インドネシア語、ミャンマー語、モンゴル語
ウルドゥー語、ベンガル語、アラビア語
ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語
その他アジア言語、その他ヨーロッパ言語

株式会社 ジェスコポレーション

<http://www.jescorp.co.jp/>

〒220-0003 横浜市西区楠町 4-7 ニッセイ横浜楠町ビル6F
TEL 045-313-3721 FAX 045-314-3765



SUNFLARE Academy
サン・フレア アカデミー

サン・フレア アカデミーは、翻訳会社サン・フレアが母体の翻訳スクール。創業約40年、50以上の言語とあらゆる産業分野に対応する翻訳サービスで1000社以上の顧客から高い評価を得ているサン・フレアにおいて高品質の翻訳を提供しているのは登録翻訳者。その約8割がサン・フレア アカデミーから巣立った人材です。サン・フレア アカデミーは翻訳実務での豊富なノウハウと現場のニーズを活かし、次世代の産業翻訳業界を担う優秀な翻訳者の養成に力を注いでいます。

(株)サン・フレア/サン・フレア アカデミー

<http://www.sunflare.com/academy/>

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-7 新宿ヒロセルビル2階
TEL 03-6675-3965 FAX 03-6675-3968



ベストな品質を提供するために大切なことは

お客様の要件を翻訳者の皆様に正しく伝え、必要な情報を皆様と迅速・的確に共有することだと考えています。お客様のフィードバックも適時に還元します。US、欧州、中国、韓国をはじめとする当社の海外拠点とも歩調を合わせ、時差を利用して世界のあらゆる言語に対応します。十印を支えるのは皆さまの協力をおいて他にはありません。プラスのしるし、十印は業界のパイオニアです。ご応募をお待ちしています。

株式会社 十印

<http://www.to-in.com/ja/>

〒141-0031 東京都品川区西五反田 7-25-5
TEL 03-5759-4353 FAX 03-5759-4376



HONYAKU CENTER
New Standards in Translation

翻訳センターグループは、日本最大規模を誇る外国語サービスの総合サプライヤーです。

- 「世界の語学サービス会社ランキング」
4年連続アジア第1位
- 2006年、産業翻訳業界で初の株式上場
(証券コード 2483)
- 専門性の高い翻訳を提供
(特許、医療、工業ローカライズ、金融法務)
- 翻訳以外の外国語サービスも展開
(通訳、派遣、コンベンション、MW、
外国特許出願支援、多言語コールセンター)

株式会社 翻訳センター

<http://www.honyakuctr.com/>

〒541-0056 大阪府中央区久太郎町 4丁目1番3号 大阪御堂筋ビル13階
TEL 06-6282-5010 FAX 06-6282-5018



翻訳者・校正者・チェッカーを大募集中!
スピード翻訳 by GMO の翻訳者に
ご登録いただくと…

- 24時間365日、ウェブから翻訳案件を受注できます
- 空き時間を有効活用できる小規模の案件から、翻訳に数日を要する中規模案件まで積極的に受注できます
- 手紙や一般的なビジネス文書から、医療、契約書、論文までさまざまなご依頼案件が受注できます

GMOスピード翻訳株式会社

<https://www.quicktranslate.com/>

〒203-0051 東京都渋谷区桜丘町 26-1 セルリアンタワー 10F
TEL 03-6415-7189 FAX 03-6674-2482

38言語翻訳
Trans-Pro

翻訳プロ (trans-Pro.) は 38 言語対応クラウド型のオンライン翻訳サービスです。お客様評価や指名・お気に入り登録等、お客様の利便性に加え高品質な翻訳提供のため翻訳者皆様のことも考えて設計されています。

- 実績数・評価が上がると翻訳料金 UP!
- 指名をもらうと更に翻訳料金 UP!

あなたもここで、チャレンジしませんか?

→翻訳プロ登録 <https://www.trans-pro.net/>

(株)ビーコスでは 162 言語 168 ヶ国の登録者と翻訳・通訳以外にも様々なサービスを提供中!

→その他スタッフ登録 <http://staff.hiwork.jp/>

株式会社ビーコス/翻訳プロ (trans-Pro.)
<http://www.b-cause.co.jp/>

〒105-0013 東京都港区浜松町2-1-3 第二森ビル4階
TEL 03-5733-4264 FAX 03-3433-3320

 **MEMSOURCE**

「最もユーザーフレンドリーな CAT ツール」
「翻訳メモリと用語集の共有、
カスタマイズ可能な自動通知メールのおかげで
我々の時間はかなり短縮されました」
「翻訳の生産性が 50%向上しただけでなく
コストが 20%削減しました。」

Memsource (メムソース) をご愛用頂いている
お客様から、こんなお声を頂戴しています。
業務効率化のためのクラウド型翻訳支援ツール
日本語デモ・資料請求はこちらまで
japan@memsource.com

Memsource

<https://www.memsource.com/ja>

Memsource Technologies, Spalena 51,
110 00 Prague, Czech Republic

ASCA

株式会社 アスカコーポレーション

— ASCA の「翻訳者育成」の取り組み —
ASCA は医薬 / バイオ分野に特化したドキュメントサービスを提供しています。高い専門性を持つ翻訳者の育成に力を注いでいます。

●オンライン講座「ASCA Academy」
登録翻訳者を対象としたセミナーを月 1 回以上の頻度で実施

●ミーティングの実施

大規模案件のキックオフミーティングなどを随時実施。翻訳者同士の情報交換も支援

●フィードバックシステム

品質管理工程の結果を翻訳者と共有

株式会社アスカコーポレーション

<http://www.asca-co.com/>

〒541-0046 大阪市中央区平野町1-8-13 平野町八千代ビル9F
TEL 06-6202-6272 FAX 06-6202-6271

翻訳業界 インデックス

翻訳業界をリードする
企業をご紹介します!

翻訳者をはじめ、
翻訳者を目指している方、
翻訳の依頼をお考えの方など
翻訳会社やスクールを
お探しの方は
このインデックスを
是非ご活用ください。

掲載会社募集中!

募集**広告募集のおしらせ**

翻訳者、翻訳会社を対象とする広告や特集記事に関連する広告を随時募集しています。詳しくはJTF事務局までお問い合わせください。

JTF事務局 : TEL 03-6228-6607

E-mail info@jtf.jp

広告募集 HP : <http://journal.jtf.jp/ads/>

Next Issue

翻訳の未来を考える

次号
予告**JTF**

#284 2016 07/08 JOURNAL

2016年7月8日発行予定

※発行日や内容は変更になる可能性があります。

巻頭特集「JTFウェブサイト改造計画」(仮題)

一般社団法人日本翻訳連盟ではこれまで、ホームページの企画運営を「ホームページ委員会」が、またJTFジャーナルの編集発行を「ジャーナル編集委員会」がそれぞれ担当してきましたが、新年度から二つの委員会を統合してあらたに「広報委員会」を発足し、

今後は広報委員会がホームページとJTFジャーナルをまとめて担当することになりました。

次号では、これからJTFウェブサイトをどのように新しい時代に合わせたものに変えていくのか、現在進行中の改造計画をご紹介します。

読者の皆様のご意見をお待ちしています。ご意見のあるかたはJTF事務局までお知らせください。

*Editor's
note***LocWorld Tokyoの成功**

4月13日から15日にかけて、日本では初となるLocWorldが新宿京王プラザホテルにて開催されました。(http://locworld.com/events/locworld30-tokyo-2016/) LocWorldは毎年、アジア・欧州・北米で開催されており、2003年10月にシアトルで最初のカンファレンスを開催してから30回目となります。

ローカリゼーション業界だけでなくいまや翻訳業界を代表する国際イベントとして定着したLocWorldですが、アジアでは初めて2007年に上海で開催された後はしばらく開催されておらず、定期開催になったのは3年前からです。2013年にシンガポール、2014年にバンコック、2015年に上海ときて、2016年にやっと東京で開催されました。

2日間で15万円前後の参加費がかかるイベントにいったい何人が集まってくれるのだろうと気になっていましたが、アジアでは過去最多となる300名を超える参加者を集める大成功となりました。パイオニアのリスクをとってLocWorld東京招致のホストの役割を全うした十印チームの皆さんの尽力と貢献に心から敬意を表します。

たまたま私は今回は出展者として参加しましたが、参加者を事前にネットワーキングするSNS、開催中に来訪者と来訪者をこまやかにマッチングするブッキングシステムなど、最近のITサービスをそつなく活用した運営側のノウハウについてもとても感心しました。JTFが主宰する翻訳祭も、ぜひLocWorldの運営から優れた点を学んで、より洗練されたイベントに育てていきたいというひそかな野望が芽生えた数日間でした。

編集長 **河野 弘毅**
Kawano Hiroki

JTF JOURNAL

日本翻訳ジャーナル

2016年5月/6月号 #283

発行 ● 2016年5月6日

発行人 ● 東 郁男(会長)

編集人 ● 河野 弘毅

発行所 ● 一般社団法人日本翻訳連盟

〒104-0031 東京都中央区京橋3-9-2 宝国ビル7F

TEL 03-6228-6607 FAX 03-6228-6604

info@jtf.jp http://www.jtf.jp/

企画・編集 ● ジャーナル編集委員会

校正協力 ● 犬東 奈穂子、大谷 真由美、笠川 梢、中尾 千恵

花嶋 みのり、松浦 悦子、矢能 千秋

表紙撮影 ● 世良 武史

デザイン ● 中村 ヒロユキ(Charlie's HOUSE)

印刷 ● 株式会社 プリントバック



募集中!

営業、コーディネータ、
校正スタッフなど、多くの人材を
各拠点で募集しております!

言語 英語・中国語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ロシア語
韓国語 等(その他言語も募集中)

分野 特許・工業・医薬・金融・ローカライゼーション

内容 翻訳者・校正者・メディカルライター・通訳者・ワープロ外注
テーブライター 等

応募方法 下記ウェブサイトからご応募下さい



株式会社 翻訳センター JASDAQ 証券コード:2483

大阪 大阪市中央区久太郎町4丁目1番3号 大阪御堂筋ビル13階
TEL:06-6282-5010 E-Mail:info@honyakuctr.co.jp

東京 東京都港区三田3丁目13番12号 三田MTビル8階
TEL:03-6369-9965 E-Mail:freelance@honyakuctr.co.jp

名古屋 名古屋市中村区名駅3丁目16番4号 太陽生命名駅ビル5階
TEL:052-571-2101 E-Mail:nagoya@honyakuctr.co.jp

募集要項・会社概要等、詳しくはウェブサイトをご覧ください <http://www.honyakuctr.com/>

産業翻訳の
新たなカタチ、
構築中...

「翻訳業界インデックス」 掲載募集のお知らせ

「翻訳業界インデックス」は、
テキストベースの広告スペースです。
御社の強みを「コトバ」でアピール。
業界でのステータスアップに
ご活用ください!

販売価格

1年6号分のご契約になります。

1年契約 6万円 (税別)
(1号あたり1万円)

販売区画は、限定**36社**のみです。
なくなり次第終了とさせていただきます。
お早めにお申込みください。

お申込み、ご不明な点は?

（ 貴社名
ご担当者部署/役職名
ご担当者氏名
電話番号

を明記の上、下記まで
お問い合わせください!

E-mail : info@jtf.jp
(JTF 事務局宛)

サンプル見本 →

ロゴ : ai または eps ファイル
(高さ 10mm 以内で使用します)

PR文 : 1行 21文字 × 12行以内

必要なのは
ロゴデータとPR文のみ。
広告の制作費が不要なので
リーズナブルです。

※デザイン、レイアウトの指示はできません。

御社名
ウェブサイトURL
住所
電話、ファックス番号

一般社団法人
日本翻訳連盟
Japan Translation Federation

JTFは翻訳に関わる企業、団体、個人の会員からなる産業翻訳の業界団体です。

MISSION

- JTFは産業翻訳の業界団体として、常に時代の変化と潮流を読み、業界の健全な成長と発展に寄与します。
- JTFは会員間の連携を促すことから、信頼あるプロフェッショナルの地位向上を目指します。
- JTFは急速に進むグローバル化の中で、会員のビジネスチャンスの拡大とJTFブランドの向上に努めます。

一般社団法人 日本翻訳連盟
<http://www.jtf.jp/>

〒104-0031 東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL. 03-6228-6607 FAX. 03-6228-6604

頒布価格 540円 (税込)

一般社団法人 日本翻訳連盟
日本翻訳ジャーナル
2016年5月6日発行
JTF JAPAN TRANSLATION FEDERATION